ACRYLART

アクリラート別冊2006

The Scholar 20 Perspective

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊 2006

Holbein

ごあいさつ

１年間にわたる色材の無償提供による現代美術家の支援を目的としたホルベイン・スカラシップも、19回目が修了いたしました。この「アクリラート別冊」は、その奨学者20名の作品とレポートを紹介する冊子です。
芸術、美術というものの本質を成しているのは、人間の精神であり、それらの作品は、アーチストである作家の精神活動の、作家自身の描くあるいは造るという身体運動を通じて残された痕跡に過ぎません。精神そのものが物質化しているわけではないので、作品とは何の実用性もない色の塊であったりします。それに対し「美しい」とか「心地よい」という物質を越えた価値を見い出すのもやはり人間の精神活動によるものです。
美術作品とは、物理的な用を為すものでない代わりに、人間の心に直接作用するというむしろ極めて高度な装置だと言えます。目に見える物質と目に見えないデジタル信号が世界のすべてだと錯覚してしまいがちなこの現代にあってこそ、人間が精神的な活動体であることを再認識させてくれる美術の存在意義は、ますます大きなものとなってゆくでしょう。それだけに、勇敢にその世界に身を投じて制作を続けようとする気勢あふれる若き作家たちの存在は大変頼もしいものです。素材の提供者である私共の立場としては、彼等の気勢に応えるべく、その精神活動の痕跡をより正確にとどめ得る質の高いマテリアルを常に追求していきたいと願っています。

2006年6月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第19回奨学者（五十音順）

青柳加奈子 AOYAGI Kanako …… 12 ・ 34

伊藤隆之 ITo Takayuki …… 13 ・ 37

稲毛　敦 INAGE Atsu …… 14 ・ 40

大浦こころ OURA Kokoro …… 15 ・ 43

大西伸明 ONISHI Nobuaki …… 16 ・ 46

君島彩子 KIMIJIMA Ayako …… 17 ・ 49

熊谷美奈子 KUMAGAI Minako …… 18 ・ 52

児玉太一 KODAMA Taichi …… 19 ・ 55

小柳　裕 KOYANAGI Yutaka …… 20 ・ 58

佐々木健 SASAKI Ken …… 21 ・ 61

佐藤万絵子 SATO Maeko …… 22・64

サトウユウ子 SATO Yuko …… 23・67

仙石裕美 SENGOKU Hiromi …… 24・70

多田由美子 TADA Yumiko …… 25・73

中岡真珠美 NAKAOKA Masumi …… 26・76

橋爪　彩 HASHIZUME Sai …… 27・79

藤田真理 FUJITA Mari …… 28・82

細川憲一 HOSOKAWA Kenichi …… 29・85

森本　玄 MORIMOTO Gen …… 30・88

山田彩子 YAMADA Ayako …… 31・91

The Scholar Perspective 20

Works

第19回奨学者の作品

青柳加奈子

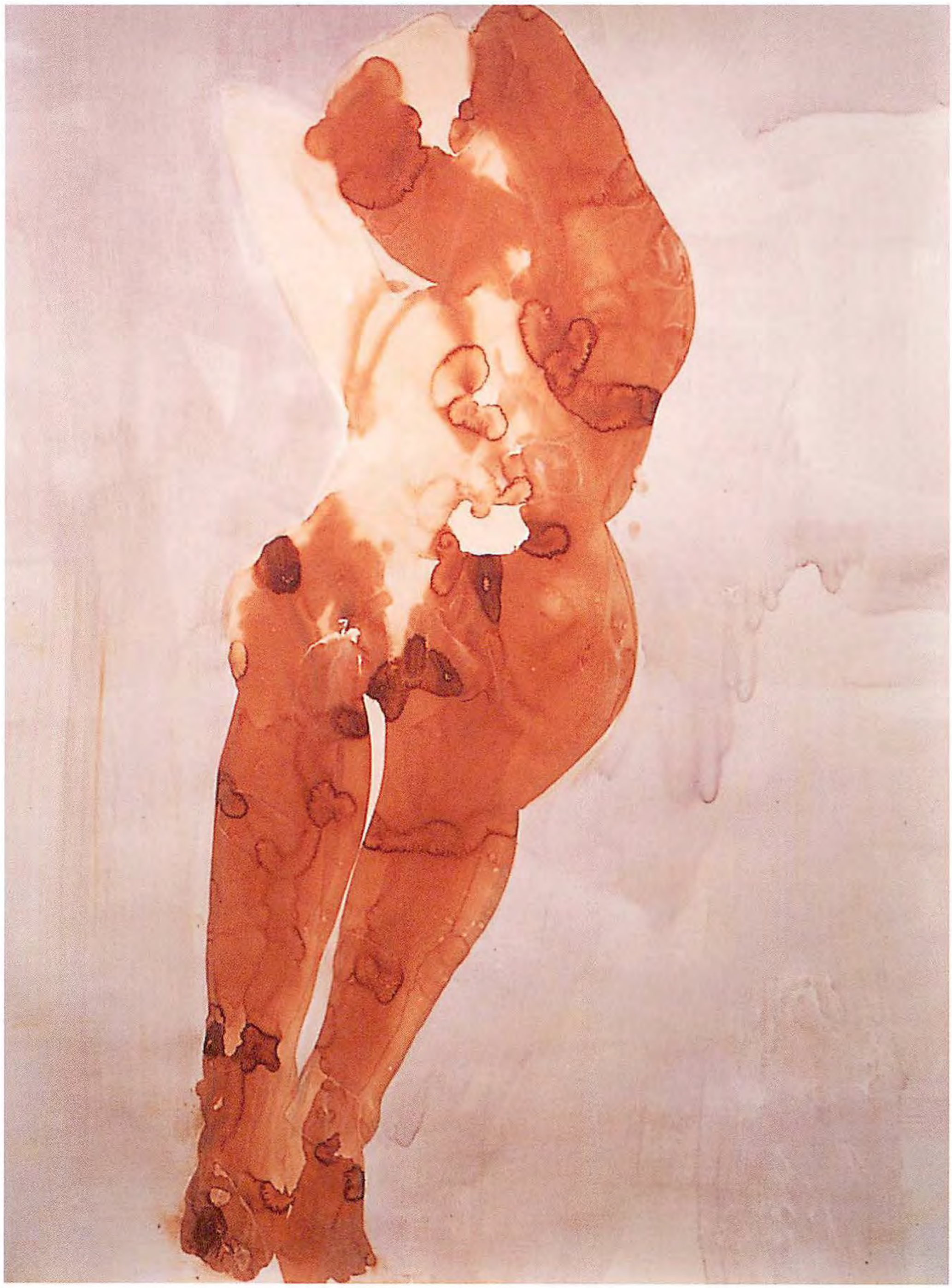
Vacation
キャンバス、綿布、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2006 年
photo by　柳場 大

伊藤隆之

painting / 田
麻布、乳濁液地、油彩
130.3 × 194.0 cm
2005 年

稲毛　敦

06-14
ミクストメディア（油彩他）
33.3 × 33.3 × 1.7 ㎝
2006 年



大浦こころ

寝ころぶ人
紙、水彩絵具、ガッシュ
205.0 × 152.0 ㎝
2006 年

大西伸明

shika no tsuno

ポリエステル樹脂、エポキシ樹脂、アクリル

14 × 44 × 14 cm

2006 年

photo by　豊浦英明

君島彩子

atmosphere　“7:54 a.m.”
キャンバス、油彩、蜜蝋
112.0 × 146.0 cm
2005 年
photo by　島津知子

熊谷美奈子

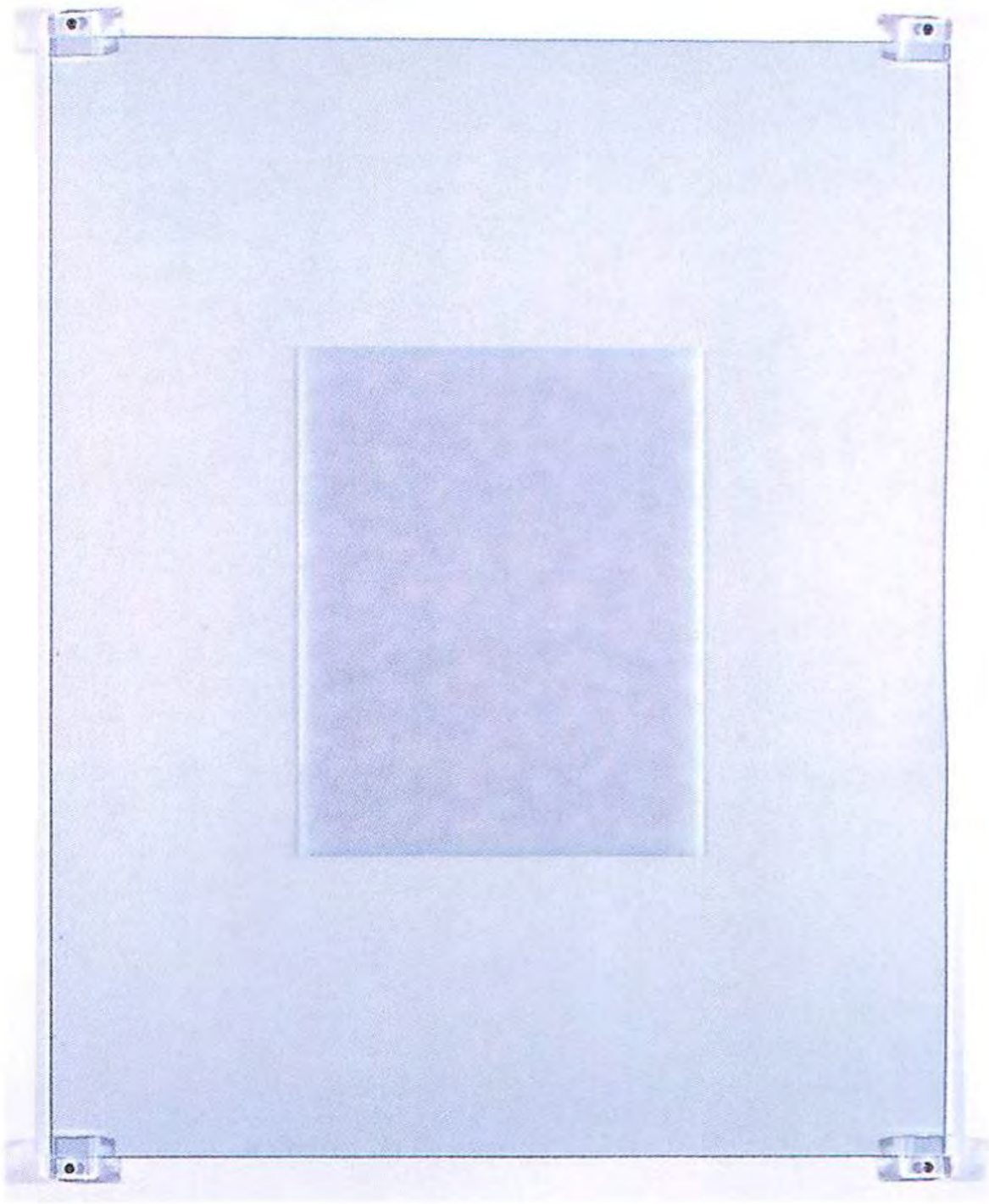
White

厚紙、和紙、アクリル、モデリングペースト、ジェッソ

右：20.5 × 27.5 × 27.5 ㎝

左：18.0 × 28.5 × 28.5 ㎝

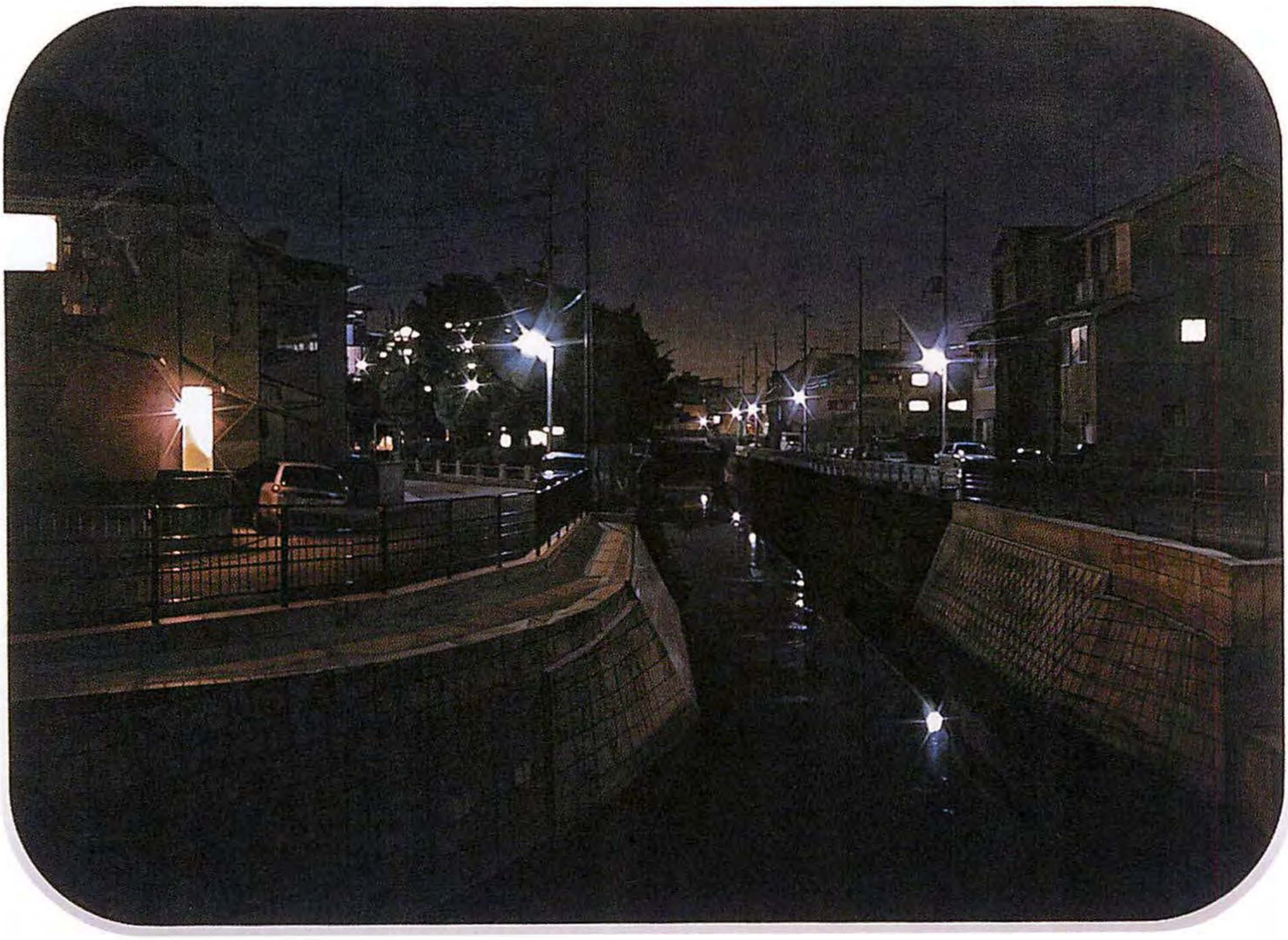
2005 年



児玉太一

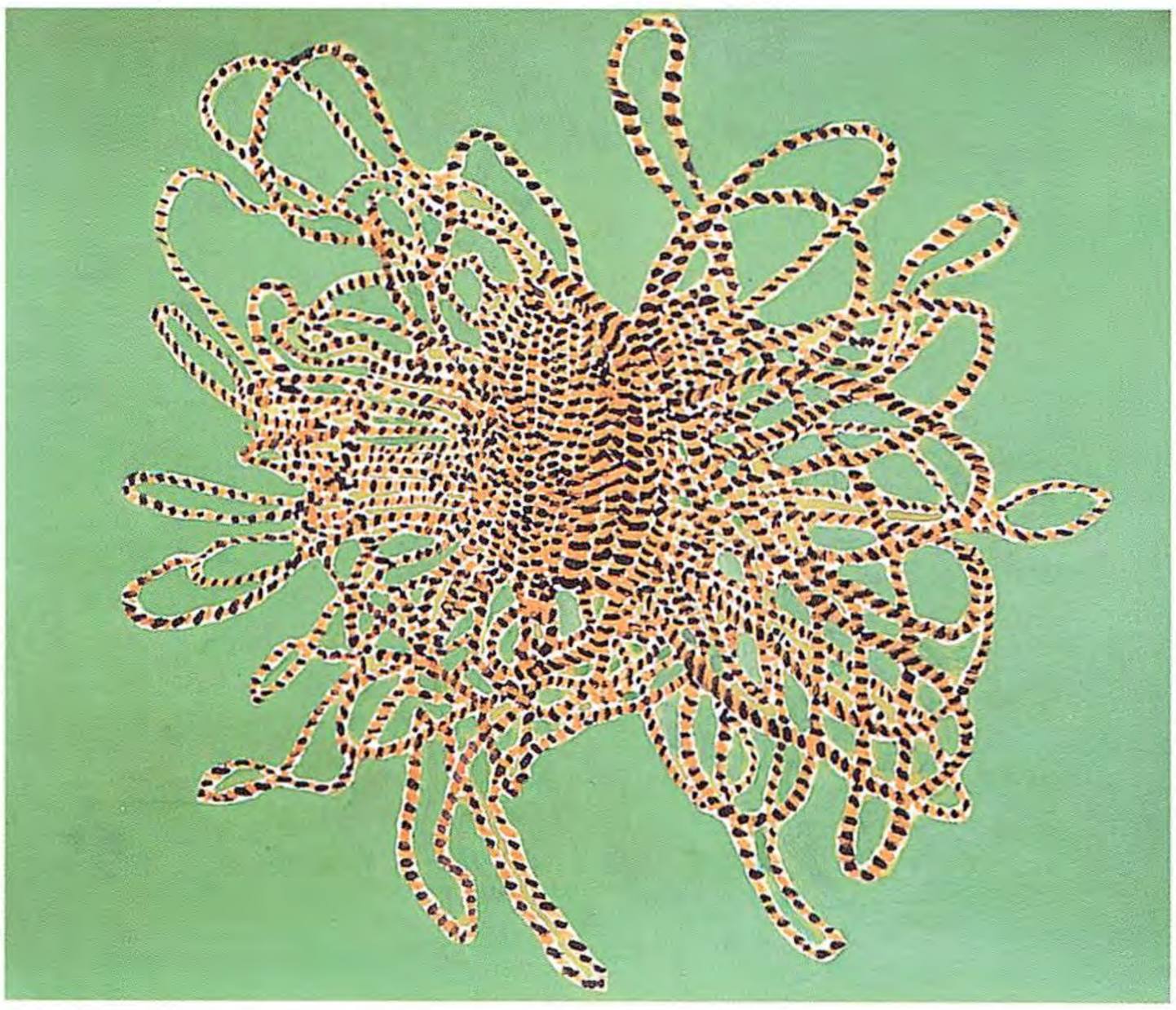
float
無反射ガラス、ガラスプライマー、アクリル、シルクスクリーン
56.0 × 45.7 × 0.2 ㎝
2006 年

art in transit vol.9/2006 年 3 月 2 日・3 日　ザ・パレスサイドホテル 427 号室
2006 年



小柳　裕

From the bridge
パネル、綿布、アクリル、油彩
132.0 × 184.0 ㎝
2006 年
photo by　怡土鉄夫



佐々木健

String
紙、アクリル
45.0 × 53.0 ㎝
2005 年

佐藤万絵子

上：**in the picture/out of the picture**
和紙、オイルパステル
下：**in the picture/out of the picture（日没後）**
和紙、オイルパステル、スライドプロジェクター
会場サイズ：800.0 × 562.0 × 275.0 ㎝
2004 年
photo by　柳場 大

サトウユウ子

INNER LIFE 051107
綿布、アクリル
40.0 × 40.0 ㎝
2005 年

仙石裕美

パネル、油彩、鉢植え（生花）、鉢植え用ケース
65.0 × 56.0 × 10.0 ㎝
2006 年

多田由美子

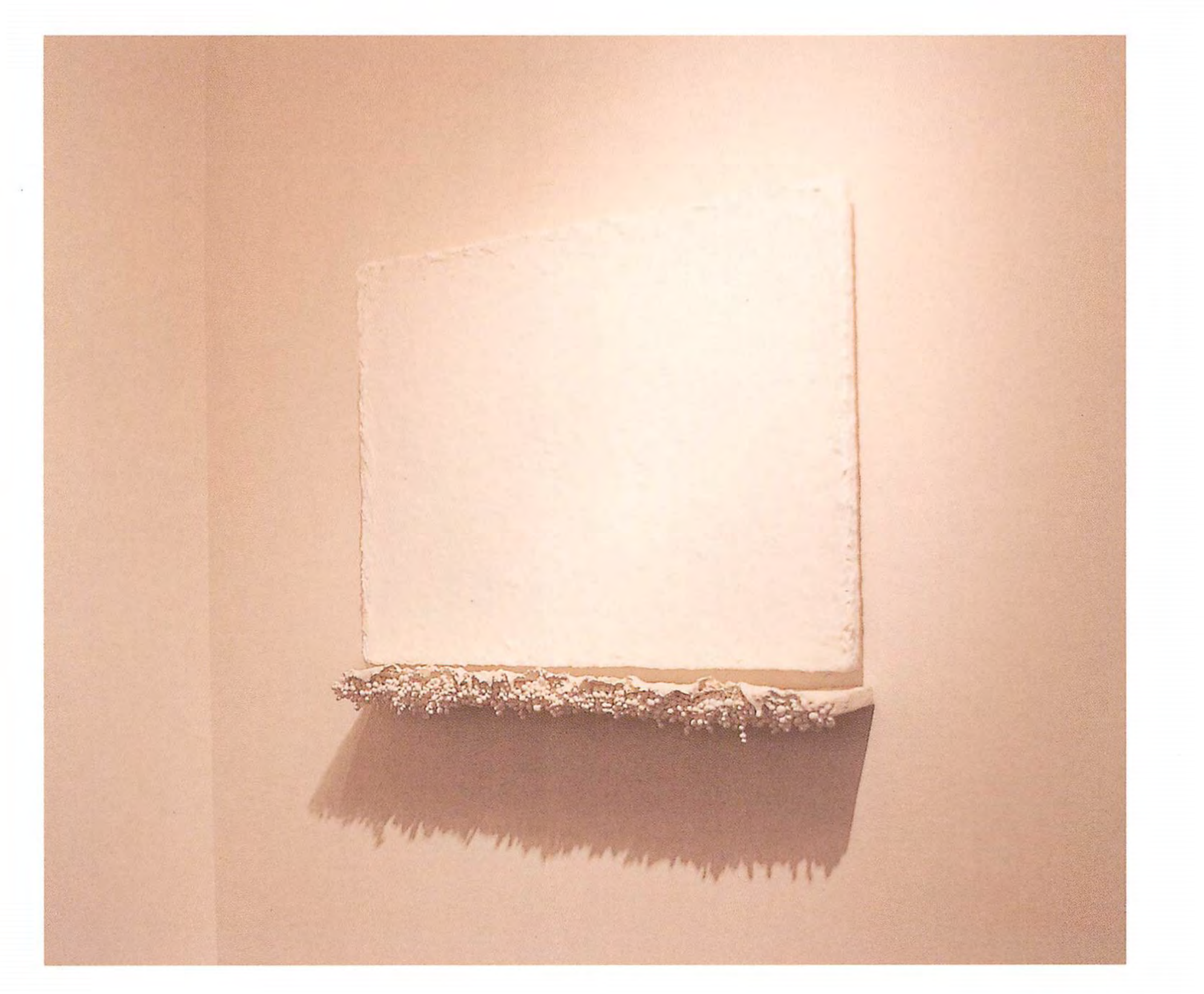
とどまりつづけるから
キャンバス、油彩、オイルバー
162.0 × 97.0 ㎝
2005 年
photo by　中川達彦

中岡真珠美

cross
キャンバス、油彩、アクリル、カシュー
145.0 × 140.0 ㎝
2005 年
photo by O ギャラリー eyes

橋爪　彩

mirror,mirror,oh my mirror
パネル、ジェッソ、油彩
80.5 × 51.5 ㎝
2006 年



藤田真理

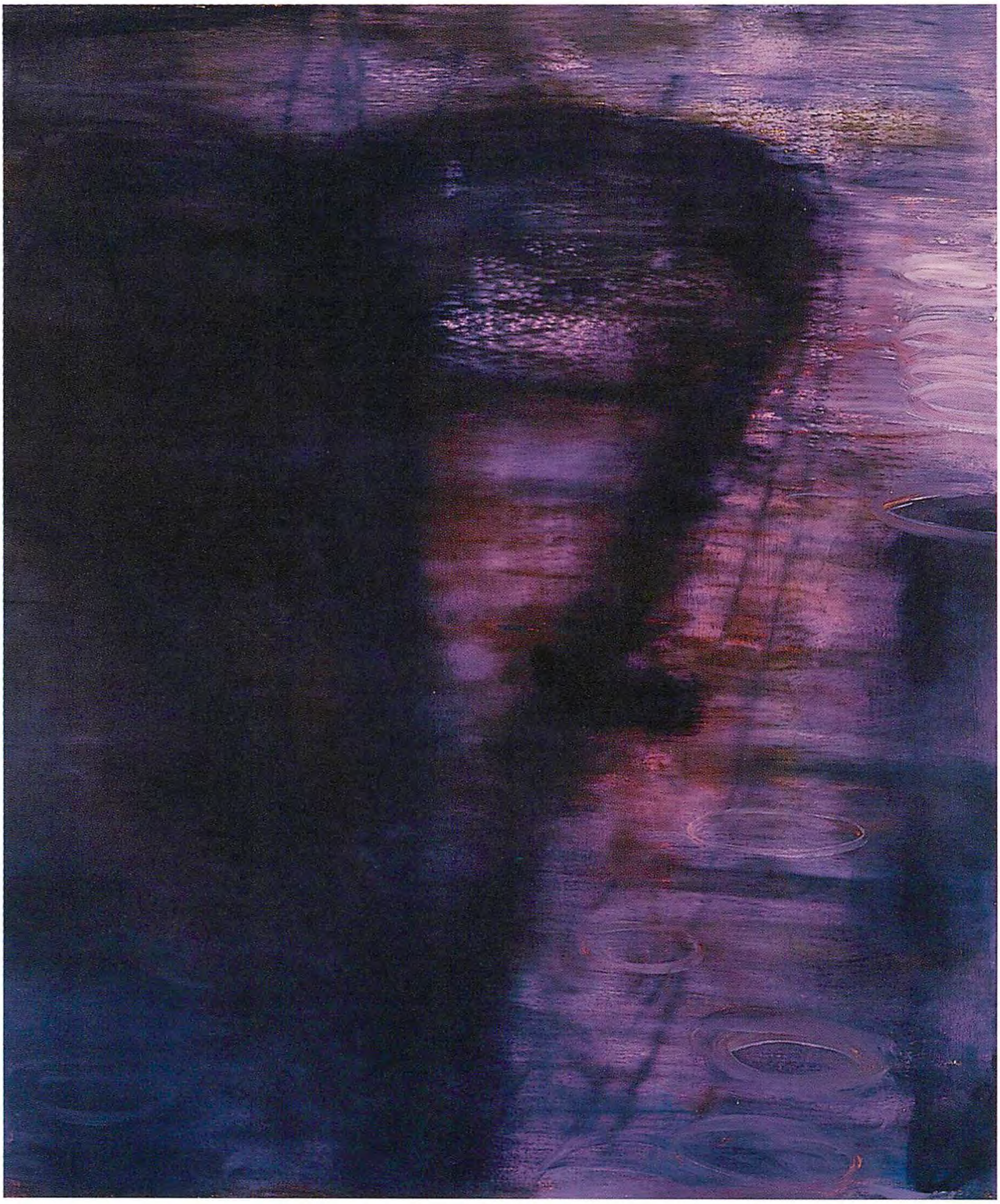
沈黙の壁 Ⅱ

パネル、樹脂粘土、アクリル、ジェッソ

77.0 × 91.0 × 11.8cm

2005 年

photo by　小園井常久



細川憲一

Trace 重なるときのかたち Ⅱ
キャンバス、油彩
194.0 × 162.0 ㎝
2005 年
photo by　末正真礼生

森本　玄

between sky and earth
キャンバス、油彩、写真
194.0 × 162.2 ㎝
2005 年
photo by　森宮英文

山田彩子

きょうのおすすめ(specialitatea casei)
綿布、ソフトパステル、顔料、アクリル
120.0 × 150.0 ㎝
2006 年
photo by Bogdan Garbovan

The Scholar Perspective 20

Report Enquete

第19回奨学者のレポートより

AOYAGI Kanako

青柳加奈子

ともすれば見逃してしまいそうな、日常の中にあるカタチや模様に心をひかれます。

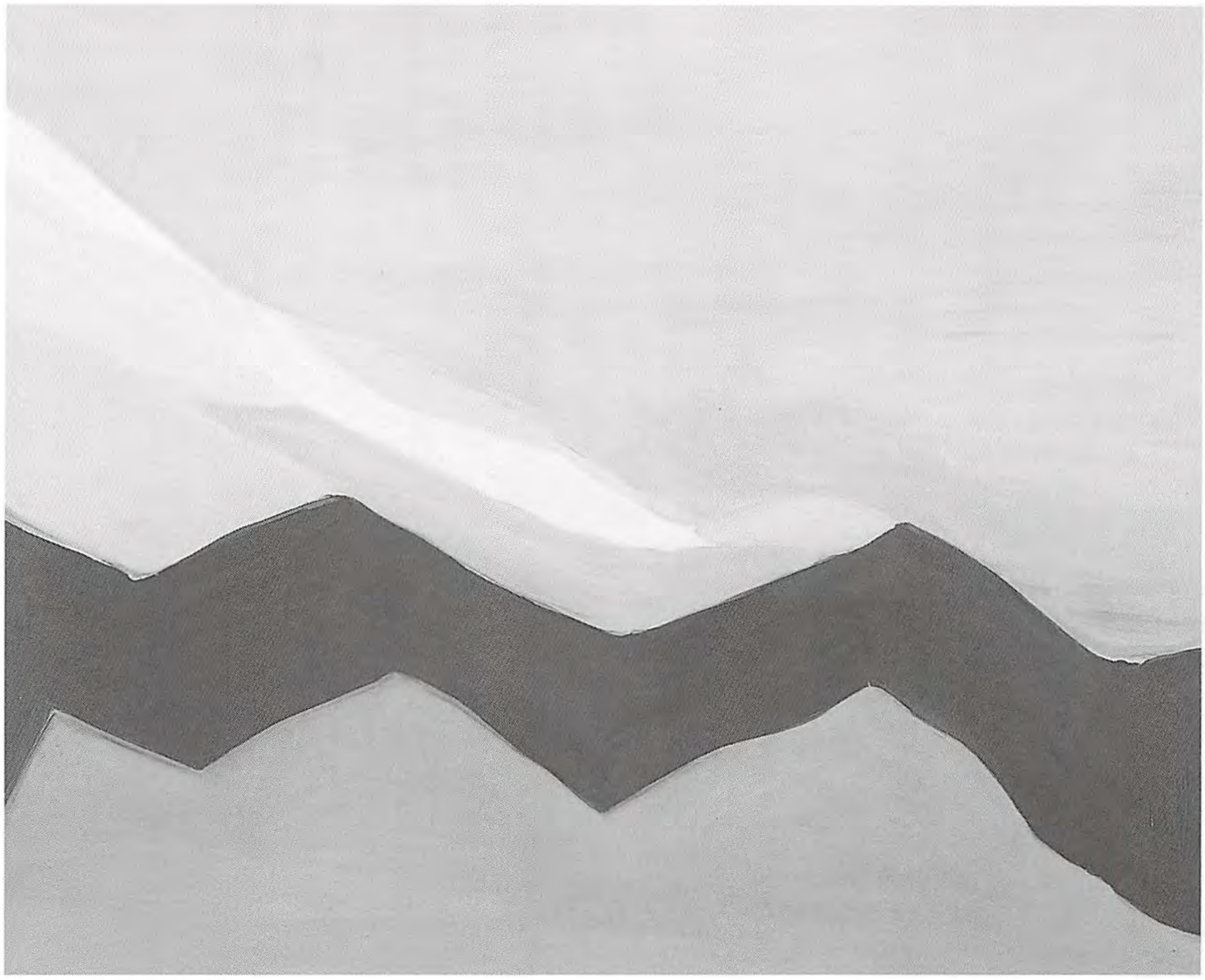
その中に、はっきりとした存在感や魅力を感じます。

制作は、雑誌や印刷物などからごく限られた一部分をトリミングすることから始まります。それは風景の一部であったり、既製品の模様だけを抜き取ったものであったり、何かしらの部分です。

切り取った部分の中には、普段見慣れないような光景があって、その見え方に良い刺激を受けて、絵に描き起こしていくのですが、時には、その景色は、何てことのない情景のようにも見えてきたりしますが、それらは、場合によっては、具体的に浮き出されたり、気配になったりもします。

トリミングすることによって、無限に広がる光景と、見たことのない景色との繋がりとを失わずに、向き合っていけたらと思います。

ヤマオリ　タニオリ
キャンバス、綿布、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2006 年
photo by　柳場 大



Vacation Ⅱ
キャンバス、綿布、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2006 年
photo by　柳場 大

◆青柳加奈子

1978 年　山梨県生まれ
2003 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2005 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2003 年　「Side view」　exhibit LIVE[laiv]／東京
2005 年　トーキョーワンダーウォール都庁 2004　東京都庁／東京
　　exhibit LIVE & Moris ／東京
2006 年　- 側景 -　トーキョーワンダーサイト／東京

グループ展他
2004 年　フェスタ古内イン相模大野　Studio ONO ／神奈川
　　トーキョーワンダーウォール公募 2004　東京都現代美術館／東京
2005 年　fantastic　exhibit LIVE & Moris ／東京

ITO Takayuki

伊藤隆之

私の視点

絵を描きながら日々過ごしていくためには、精神的な面をうまくコントロールしていかなければならない。絵を描くことだけにかかわらず、一人の人間として誠実に、正直に生きていくことは、なによりも心の支えとなる。

日常生活における一つ一つの行動は私にとって作品制作に関わる重要なきっかけでもあり、自分の作品と社会を繋ぐ大切な要素でもある。

私の父は毎朝必ずマラソンをしている。雨の日も雪の日も、とにかく走る。仕事で東京に出張してきたときも、父は東京都庁の周りを走っていたそうだ。そこまでマラソンをしなければいけない理由は何なのか、昔は理解できなかった。しかし、現在の私には少しずつその理由がわかってきた気がする。

電車に乗ると、椅子に座ることなく扉付近の隅に身を寄せる。

私にとって一番落ち着く場所である。窓の向こう側には、模型のように細やかな風景が広がってみえる。

私は小説を読むこともなく、じっとその向こう側をみつめながら、もの思いにふけるのである。

携帯電話の音が車内に鳴り響く。

隣りの女子高生が堂々と電話に出る。

「あ～？もしもし～？#%&&$%&%・・・・」

いき過ぎた茶髪や真っ黒い眼の周り、だるだるの制服に関しては、個人個人色んな価値観があるからまだなんとなく許せるかもしれない。でもマナーが悪すぎるのではないか。

しかし、注意などさらさらできない。

車内の吊り広告を見ると、今日も本当か嘘かよくわからない情報が陳列されていて、その脇には今が旬のアイドルが微笑んでいる。おそらく数年後にはなかなか世にみることができなくなるだろう。しかも、そんな奴いたっけ？と話のネタにされ、忘れ去られる。そんな世の中だ・・・。

日本は平和で、豊かな国のようである。この国の向こう側では、戦争やテロ、暴動などが頻繁に起こっていて、毎日様々なメディアを通して知ることができる。現実

に私たちの目の前でそれらが起こったらヤバイことくらい、子供の頃からの教育を通してよくわかっている。しかし、それらに対する現実感、危機感はすくない。

私がものごころついたときには、テレビをみていた。

モニタ画面から臭いや味は伝わってこないが、美味しい食べ物が美味しそうに映っていた。深い意味や歴史はわからないが、世界中の建築物や美術品がお洒落に映っていた。それらはわざわざ現地へ行かなくともみることができた。

また、モニタ画面には、かっこいい戦闘機が空中を舞い踊りながら、謎の巨大生物を集中攻撃しまくる光景も映っていた。私は子供の頃、まるで実体験しているかのように、その勇姿あふれる映像に感激し、手をたたいていたのを覚えている。

私は、モニタ画面と向き合っているように、常々枠の向こう側にものごとをみてきたような気がする。そして、具体的なものの価値観や背景がわからず、単にビジュアル的な図録として理解している場合が多い。

間接的なものの観方が育まれたためなのか、私のような世代は、直接ものごとを実感するという意識を、自分自身の中で処理できなくなってきているように思える。

また、自分自身の意識の在り方、存在そのものにも関わってきているのではないか。

時代や環境の変化、生みだされていくメディアによって私たちの意識は大きく影響される。

私は絵を描くことを通して、私が私として今まで活きてきた事実や、これからの自己の在り方を実感しようとしているのかもしれない。

painting / 飛行機
麻布、乳濁液地、油彩
124.0 × 60.6 cm
2004 年

painting / 戦艦
麻布、乳濁液地、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2004 年

◆伊藤隆之

1978 年　山形県生まれ
2005 年　東京藝術大学大学院美術研究科修士課程油画技法材料研究室修了
　　東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画技法材料研究室在学中

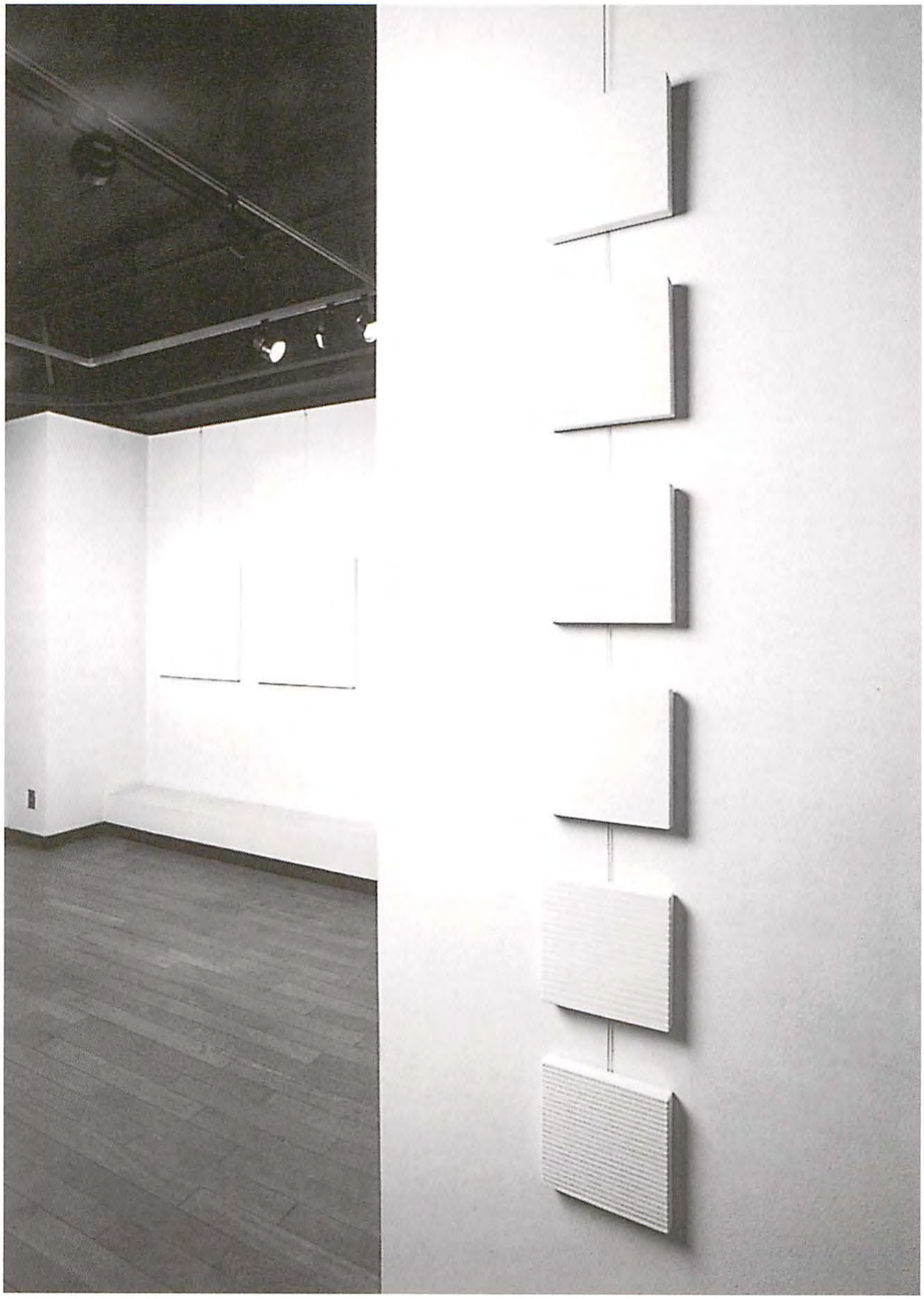
個展
2004 年　Painting　東京都庁／東京
　　LIFE WORK　トーキョーワンダーサイト／東京

グループ展他
2003 年　WEAPON　東京藝術大学構内展示室／東京
　　トーキョーワンダーウォール公募 2003　東京都現代美術館／東京
　　妙高夏の藝術工房塾　新潟県妙高高原赤倉地区／新潟
2004 年　中径展　府中市美術館／東京('04、'05、'06)
2005 年　平成 16 年度東京藝術大学卒業・修了制作展　東京藝術大学／東京
　　トーキョーワンダーシード plus　トーキョーワンダーサイト／東京
　　三つの個性　ごらくギャラリー／東京

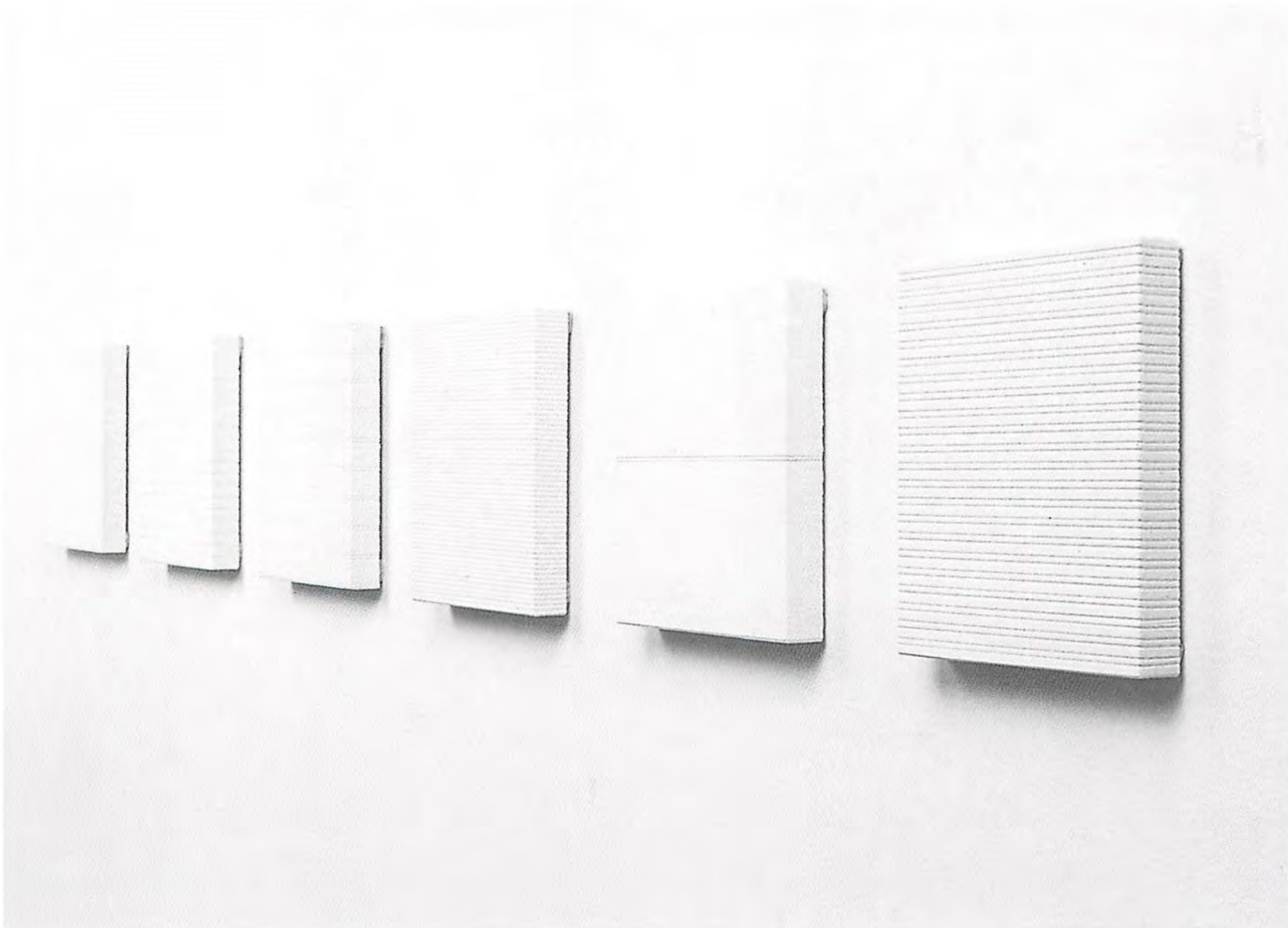
INAGE Atsu

稲毛　敦

私は、常日頃から、目の「ものを見る」という行為に疑問を持っています。目という機能は、見えてしまうからこそ、ものの本質を見えなくしてしまっているのではないだろうか。目でみえないものの中にこそ、ものの本質は存在するのではないかと感じるのです。見る者が私の作品と出会うその時、日常とは違う、そこに自らと向き合う時間と空間を作り上げたいのです。一人一人の外部に世界が在るように、一人一人の内部にも、それに相当する世界が存在します。それは無限に広がり、生き続けています。正にそこにこそ、ものの本質は存在しているのです。



個展会場風景（2006 年　フォルム画廊）



展示風景（フォルム画廊）
ミクストメディア（油彩他）
各 18.0 × 18.0 × 1.7 cm
2006 年

◆稲毛　敦

1975 年　神奈川県生まれ
2004 年　多摩美術大学大学院美術研究科修了

個展
2002 年　フォルム画廊／東京
　　東京アートファクトリー／東京
2004 年　フォルム画廊／東京
2005 年　ギャラリー山口／東京
2006 年　フォルム画廊／東京

グループ展他
2005 年　現代精鋭作家展　Field of Now 2005　　洋協アートホール／東京

OURA Kokoro

大浦こころ

最近の作業と今後に向けて

何をしようとしているのかわからなくなる時、思い浮かべる空間がある。それを「遠くまでひろがる空間」と言うことにする。あらゆる方向に遠くまで広がって、突き当たらない空間であり、細かく揺れ動いていて、光が滲み出てくる静かなところ。映像で見る宇宙のような空間だ。そういう空間を現わしたいと思ってやっている。そこへ近づくために、そのつど自分なりの課題を立て、試しながら描いている。

今までの題材に気持ちが集中しにくくなっていたので、新たに捜す。私にとって題材は、「遠くまでひろがる空間」へ近づくためのきっかけや出入り口を作るようなものだ。生活の中に小さな喜びを見つけることが、制作意欲を保つことにもなっている。散歩に行く近所の傾斜地の斜面や木々が作る空間に、ひっかかるものを見つけ出したので、これでいいのかわからないまま、描いてみる。

今回はタッチに空間意識をはっきり持って、色とタッチでやってみることにする。色は題材をきっかけにして感じられる色を使ったり、組み合わせを試してみたい色を、題材の持っている意味と関係なく使ったりする。油絵と水彩を数枚ずつ、少しずつ変えて描く。その中の一枚の油絵で、グレーの間の青から光を感じとれたので、乾くまで観察した。他の絵では乾くともたなかったが、一枚だけは画面側から弱く光る色を留めた。この経験から、色から感じられる光を意識するようになる。タッチで描くということに関しては、ある程度は自力で絵をコントロールできる実感を得たが、奥行きや空気感をうまく現わせなかった。形や構図、構成にも問題があると思えてきた。

最近の作業を通して気づいたり考えたりしたことは、題材捜しや形、構図に関しては、もっと積極的に自分の側から造り出すようにすること。空間へ導くための構成を意識的にやらなければいけない。色への取り組みの際は、現場の関係を広くよく視て感じること。見方や状況で色の見え方が全く違って見える。空間意識を変えること。現実の空間や、その空間から想像できる空間に決めつけないで、未知の空間があると仮定して、現われてくる空間をよく視るこ

と。
そして画面の上だけで世界を完成させようとするのではなく、絵とそれ以外の全ての世界や人との関係を、気持ちの上で切らないようにし、考え続けること。

斜面の間の道
キャンバス、油彩
72.7×91.0cm
2005年

◆大浦こころ

1960 年　東京都生まれ
1983 年　武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業

個展
1985 年　パレルゴンⅡ／東京
　　果樹園／東京
1986 年　村松画廊／東京
1993 年　天画廊／福岡
1994 年　福岡中央銀行　アトリウム／福岡
1995 年　旧百三十銀行ギャラリー／福岡
　　マニファクトリーギャリー／福岡
1996 年　ART SPACE 貘／福岡
1997 年　なびす画廊／東京
　　天画廊／福岡
1998 年　なびす画廊／東京
2000 年　福岡美術館市民ギャラリー／福岡
2002 年　福岡県立美術館／福岡
2004 年　ギャラリーブリキ星／東京
　　ART SPACE 貘／福岡
2005 年　ギャラリー楽／佐賀
2006 年　ギャラリーブリキ星／東京（西荻窪）にて 10 月 18 日～ 26 日迄開催予定

グループ展他
1985 年　大谷地下美術展　大谷地下採掘場跡／栃木（'86）
1986 年　万象の変様プレ展　パレルゴンⅡ／東京
　　万象の変様　埼玉県立近代美術館／埼玉
　　ニューウェイブの生成変化　Ｇアートギャラリー／東京
1987 年　エーテルの風　ー舞台美術ー　アート・スポット・フリーク／東京
　　メタルモーションⅠ　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
　　ARTIST'S NETWORK EXPADED　福岡県立美術館／福岡
1990 年　MUSEUM CITY TENJIN 原家具店、大丸デパート／福岡
1992 年　プサンビエンナーレ　釜山文化会館／韓国
　　九州コンテンポラリーアートの冒険 vol.4　イムズ／福岡
1993 年　NINGEN EXHIBITION　WALD ／福岡
1994 年　場の夢・地の声ー津屋崎現代美術展　上妻邸／福岡
1995 年　ながさき・水の波紋 '95　出島石倉／長崎
1996 年　VOCA 展 1996　上野の森美術館／東京
　　壁画　ー ART PROJECT IN YURIGAOKA ー　宇美町／福岡
1997 年　アジアの眼　福岡大学　ヘリオスプラザ／福岡
2000 年　アートラリー久留米 2000　久留米市内／福岡
2001 年　WALDGRAPH 3　WALD ／福岡
2002 年　英展　田川市美術館／福岡
2002 ～ 2003 年　現代日本の水彩表現　渋谷区立松涛美術館／東京
2003 年　福・北　美術往来　福岡市美術館／福岡

木立ちと斜面の間の空気
綿布、油彩
38.0 × 45.5 ㎝
2005 年

ONISHI Nobuaki

大西伸明

『0 → 0.0000001 → 0.0000002 → 0.0000003・・・→ 1』

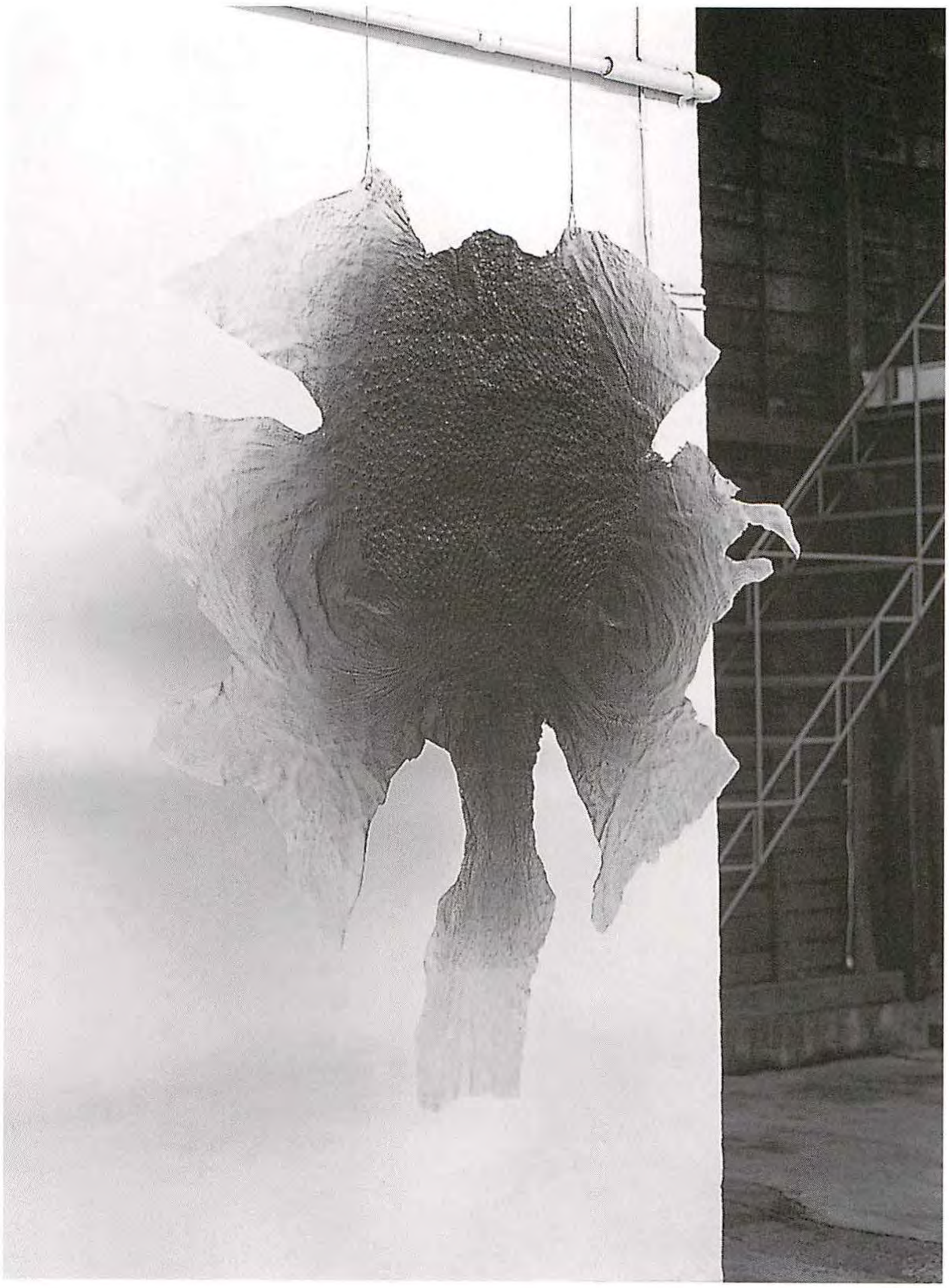
〝よく分からない〟ということは、僕にとって最も強力に諸々の本質に近づく方法の一つである。

例えば、大西伸明という人間は、昨日の大西伸明と、明日の大西伸明とは違う存在であることは疑う余地もない。つまり大西伸明という人間について考えると〝よく分からない〟が、共通認識として大西伸明にしておこう、ということになる。

例えば、ある日釣り人が魚を沢山釣り上げたとする。しかし次の日も釣れるとは限らない。何故なら、天候は常に変化し、気温は留まることを知らず、川や海は同じ流れなど繰り返しはしない。釣り名人はこんな発言をするかもしれない。「魚釣りは永遠に分からない」と。

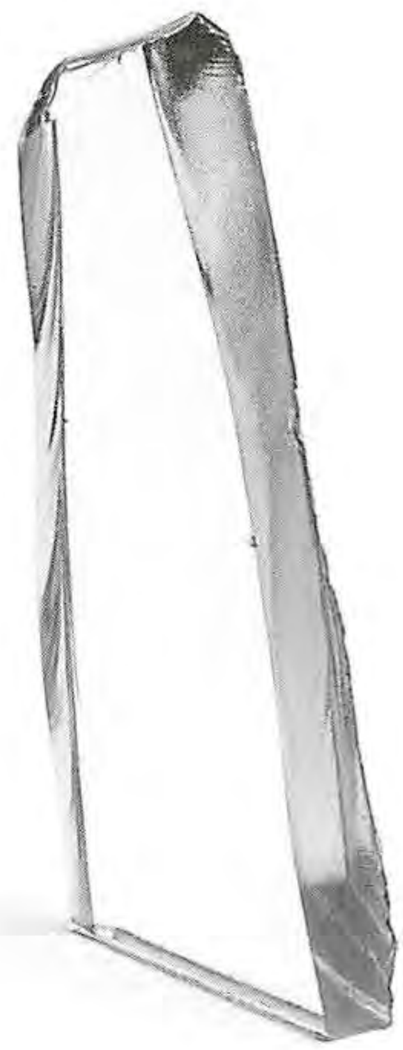
しかし、大西伸明が〝よく分からない〟ということ、魚釣りが〝よく分からない〟ということは後退していることではない。無意識のうちに大西伸明と名乗っていた時よりも、無自覚に魚を釣って喜んでいた時よりも、意識的に関わるようになっているし、より深い感覚で理解しはじめているに違いない。

世界では、白と黒、西洋と東洋、ＯＮとＯＦＦ、などの二項論で語られることが多い。僕はその二項の間に無限大のグレーゾーンを視ている。そのグレーゾーンに存在する〝よく分からない〟モノやコト達を鋭利に表現していくことが、本当の何かに近づくコトだと考えている。



kawa
エポキシ樹脂、アクリル
135.0 × 120.0 × 0.5 ㎝
2005 年
photo by　金子治夫

arumiyouki 2
アクリル樹脂、ラッカー塗料
7.0 × 17.0 × 17.0cm
2005 年
phot by　豊浦英明



garasu no hahen
エポキシ樹脂、アクリル
10.5 × 1.0 × 4.0 ㎝
2005 年
phot by　豊浦英明

◆大西伸明

1972 年　岡山県生まれ
1998 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科版画修了

個展
1995 年　Gallery COCO ／京都
1996 年　シティギャラリーI・M ／大阪
2001 年　PRINZ the gallery ／京都
2002 年　大雅堂／京都
2005 年　studio J ／大阪
　　ノマルエディション／大阪
2006 年　studio J ／大阪
　　国際芸術センター青森／青森市にて 12 月 9 日～ 2007 年 1 月 14 日迄開催予定

グループ展他
2004 年　京都府美術工芸新鋭選抜展　京都文化博物館／京都
　　アートコートフロンティア 2004　アートコートギャラリー／大阪
　　TAKE ART COLLECTION　スパイラルガーデン／東京
　　境界面　大阪成蹊大学芸術学部・space B ／京都
　　ISPA 京都会議 Power of Printing　京都文化博物館／京都
　　フィッシングダイアリー・トカップチレポート〈伊藤存・大西伸明・中瀬由央〉　REMO ／大阪
　　jarhresgaben　ノマルエディション／大阪
2005 年　フィッシングダイアリー in ReOLYMPIC〈伊藤存・大西伸明・中瀬由央〉　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
　　フィッシングダイアリー in 淡路アートフェスティバル〈伊藤存・大西伸明・中瀬由央〉　淡路島／兵庫
　　Art in CASO　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2006 年　フィッシングダイアリー in 淡路アートフェスティバル〈伊藤存・大西伸明・中瀬由央〉
　　淡路島にて 6 月 25 日～ 8 月 27 日迄開催
　　フィッシングダイアリー in アサヒエコアートシリーズ〈伊藤存・大西伸明・中瀬由央〉
　　木曽川（長野県、岐阜県、愛知県）にて 5 月～ 11 月迄開催予定（展示期間は 10 月～ 11 月）

KIMIJIMA Ayako

君島彩子

人間の存在

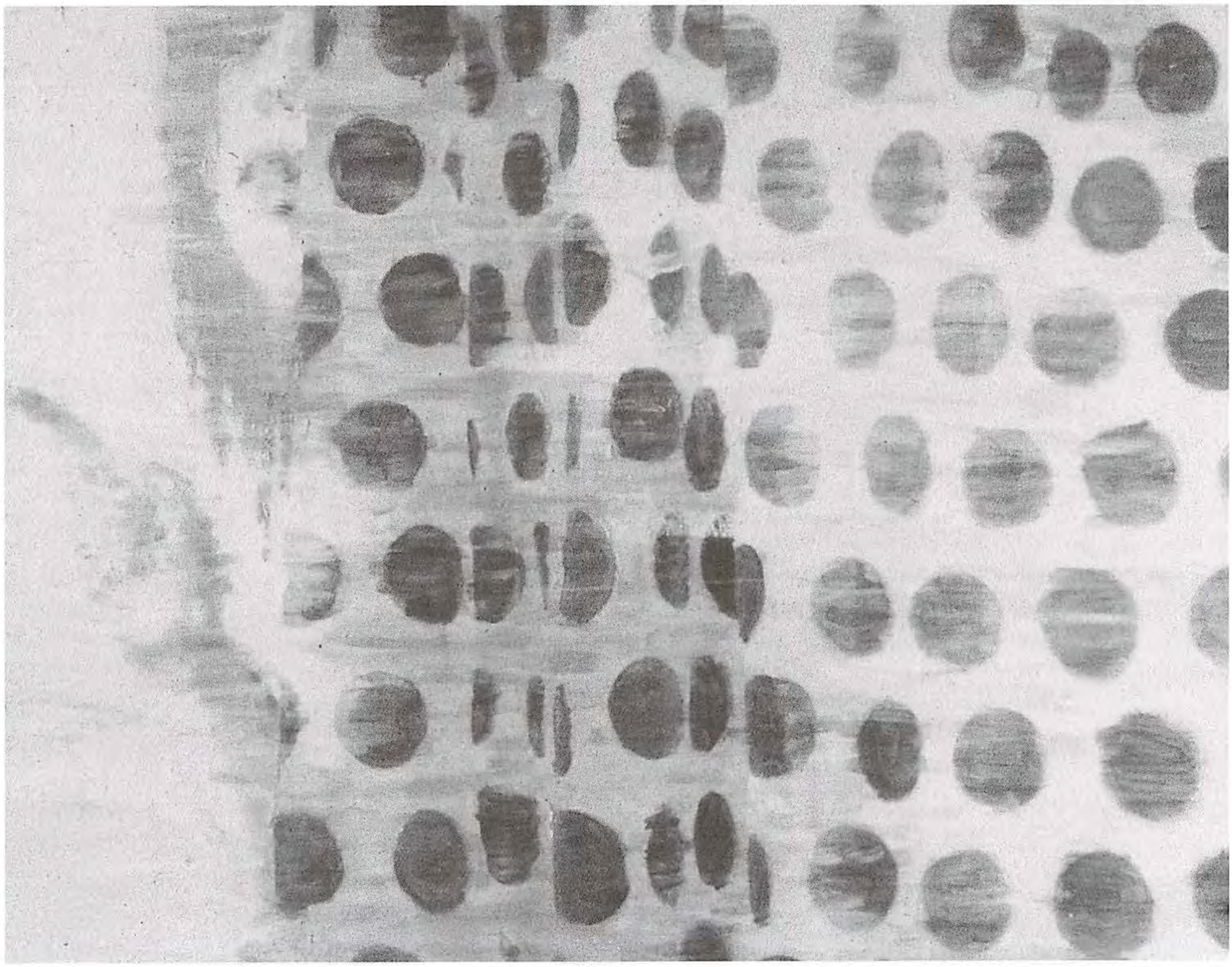
私の作品のテーマは人間が存在している事、ただそれだけの事です。

自分自身の存在、周囲の人々の存在、すれ違うだけの人々の存在、メディアを通して知っている人々の存在、そして一生出会う事はないけれど同じ地球にいる人々の存在、すべてが同じ人間ですが同じように存在を感じることはありません。

六十億人にも増えてしまった人間は自然に対し多すぎるのだから天災や戦争で人数が減る事は問題ないと言った人がいました。また別の人は天災や戦争などで死者何百人と言う前に人間が一人死んで行った事の意味を考えてみろと言いました。

人間の存在は不思議なものでこんなにも軽視されたり重視されたりしています。では人間の存在とはそんなに違う物なのでしょうか？確かに自分の周囲の人間とメディアを通して見た人間がまるで別の存在のように感じる事は誰にでもあると思います。しかし周囲の人間が確かな存在で直接会っていない人間が不確かな存在と言いきる事は出来ません。

現在「人間の存在」という大きなテーマを考えていくためにいくつかの表現手法を試みています。油彩作品『atmosphere』シリーズは自分自身を他者の視線から描いたものです。普遍的な自画像ではなく自分自身の存在すら曖昧で、ただ空気のなかにあるのだと感じる瞬間を描ければと思っています。この作品を見た人にも、画面の空気を感じて自由に人間像を想像してもらい、人間の存在の曖昧な側面を感じる一つのきっかけになればと思います。



atmosphere “dot”
キャンバス、油彩、蜜蝋
91.0 × 117.0 ㎝
2005 年
photo by　島津知子

atmosphere "11:53 p.m."
キャンバス、油彩、蜜蝋
73.0 × 60.0 cm
2005 年
photo by 島津知子

◆君島彩子

1980 年　東京都生まれ

個展
2003 年　みずほ銀行数寄屋橋支店ストリートギャラリー／東京
2006 年　現代 HEIGHTS GALLERY Den ／東京（下北沢）にて 6 月 29 日～ 7 月 11 日迄開催

グループ展他
2006 年　第 9 回岡本太郎記念現代芸術大賞展　川崎市岡本太郎美術館／神奈川

KUMAGAI Minako

熊谷美奈子

生命の表裏

ある種の爆弾と、繭や種子は、なんだか形が似ている。

かたや命を脅かすもの。

かたや生命そのもの。

全く違う正反対のベクトルを持つはずなのに、構造が似ているのは何故なのだろう。

ある日、私は紙漉き仲間と共に、とある古い私設和紙博物館を訪れた。

そこで、戦時中に使用されたという「風船爆弾」の存在を知った。

「風船」という言葉の持つのどかさと、「爆弾」という言葉の持つ血なまぐささ。

二つの単語がなかなか結びつかず、一瞬頭が混乱した。

風船爆弾とは、和紙を張り重ね、こんにゃく糊で補強して風船状にしたものに、気球のように火薬をぶら下げて浮遊させ、落ちた先の敵を攻撃するという何ともやけっぱちな爆弾である。

どこに行くかは風任せ運任せなので大半は海のもくずと消えたが、それでもそのうちいくらかはアメリカ大陸に到達し、不幸なことに数人が犠牲になったと聞いている。

もともと和紙の持つ生命感のようなものに惹かれて紙漉きを始めた自分としては、草木の命の片鱗から作った和紙で、人を殺傷するということに、非常な違和感を覚えた。

さらに気になったのは、当時風船爆弾用の和紙を漉いていた職人達が、誰一人として実物を知らなかったということだ。

現在は資料によってたやすくその形態を確認できるが、完成品を知らなかった当時の職人達は、一体どういう気持ちで、爆弾にされてしまうその素材を作らされていたのだろうか。

その一件以降、以前から紙を用いた平面～半立体～立体作品を作ってはいたが、ならば自分なりの風船爆弾、命を脅かさない、命の象徴のような風船爆弾を作ってみよう、と思い立った。

厚紙を切り抜いて接着し、そこに和紙を張り重ねて張り子状にする。

全体の質感を整えた後、黒鉛や鉛筆で、紙の張り子を塗りつぶしていく。
すると、実際は片手で持てるくらい軽いのに、まるで一見金属のように重そうな、不思議な物体が立ち上がってくる。
またあるときは、その張り子を石膏やジェッソで塗りつぶす。
こちらもまた軽いのに、石か何かのような硬質な存在感が出始める。
しかし、所詮は紙製だ。
ちょっとよく見れば、金属や石でないのは誰にでもわかる。
見えているものと本質が一致するとは限らない。
中身が詰まっていそうなのに実はからっぽ。
重そうなのに軽い。
爆弾のようでもあり、種子のようでもあり。
そこに私は、生と死、もしくは生命の裏と表のようなものが、対立ではなく、交錯しているような、ちょっと形容しがたい奇妙な感覚をおぼえる。

その「ちょっと奇妙な感覚」。
そういうものを感じてもらえるような物体を、私は作ってみたいと思う。

Small One Ⅱ
厚紙、和紙、モデリングペースト、
ジェッソ、グラファイトクレヨン
10.5 × 18.0 × 10.5 cm
2005 年

手前：**彼岸の舟**
8.5×30.0×13.0㎝
奥：**Black and White**（3点組）
各12.0×18.5×18.5㎝
厚紙、和紙、モデリングペースト、ジェッソ、アクリル、グラファイトクレヨン
2005年

◆熊谷美奈子

1971年　東京都生まれ
1995年　東京造形大学美術学科Ⅰ類（絵画）非具象コース研究課程修了

個展
1995年　ギャラリーサージ／東京
1998年　銀座九美洞ギャラリー／東京
1999年　銀座九美洞ギャラリー／東京
2000年　トキ・アートスペース／東京
2001年　トキ・アートスペース／東京
2002年　トキ・アートスペース／東京
2003年　トキ・アートスペース／東京
2004年　藍画廊／東京
2005年　藍画廊／東京

グループ展他
1993年　熊谷美奈子・水口孝一展　ギャラリーアリエス／東京
1995年　東京造形大研究課程修了展　東京造形大学美術館／東京
1999年　アーティストの周縁／Artist's proof展　TOKI Art Space／東京
2000年　若き画家たちからのメッセージ2000展　すどう美術館／東京
2003年　The Tokyo Global Art 2003 in Korea Exhibition　ギャラリーサムソンプラザ／ソヒョン〔韓国〕
Korea/Japan Modern Art Festival 2003　水原美術館／水原〔韓国〕
Tokyo Global Art 2003　O美術館／東京
2004年　ハンガリー・ジャパンアート展　ハンガリー現代美術ギャラリー／ハンガリー
トーキョーワンダーウォール公募2004　東京都現代美術館／東京
2006年　和紙に魅せられた者たちの創作展　埼玉伝統工芸会館／埼玉

KODAMA Taichi

児玉太一

２００６年に制作した作品はガラスを支持体とした。南向きの窓から自然光が入るホテルの室内において空間と馴染ませるように展示を行うことにした。時間によって変化する光、その角度によって画面は刻々と、緩やかに変化する。２㎜厚のガラスの表面にある絵の具の層はガラスを通して影を落とす。透過しはねかえった光が画面の隅を白く光らせる。

表出する画面はそれ自体があらゆる光景を内在しており、ある時にみた画面、それだけで作品があるのではないことを改めて思った。

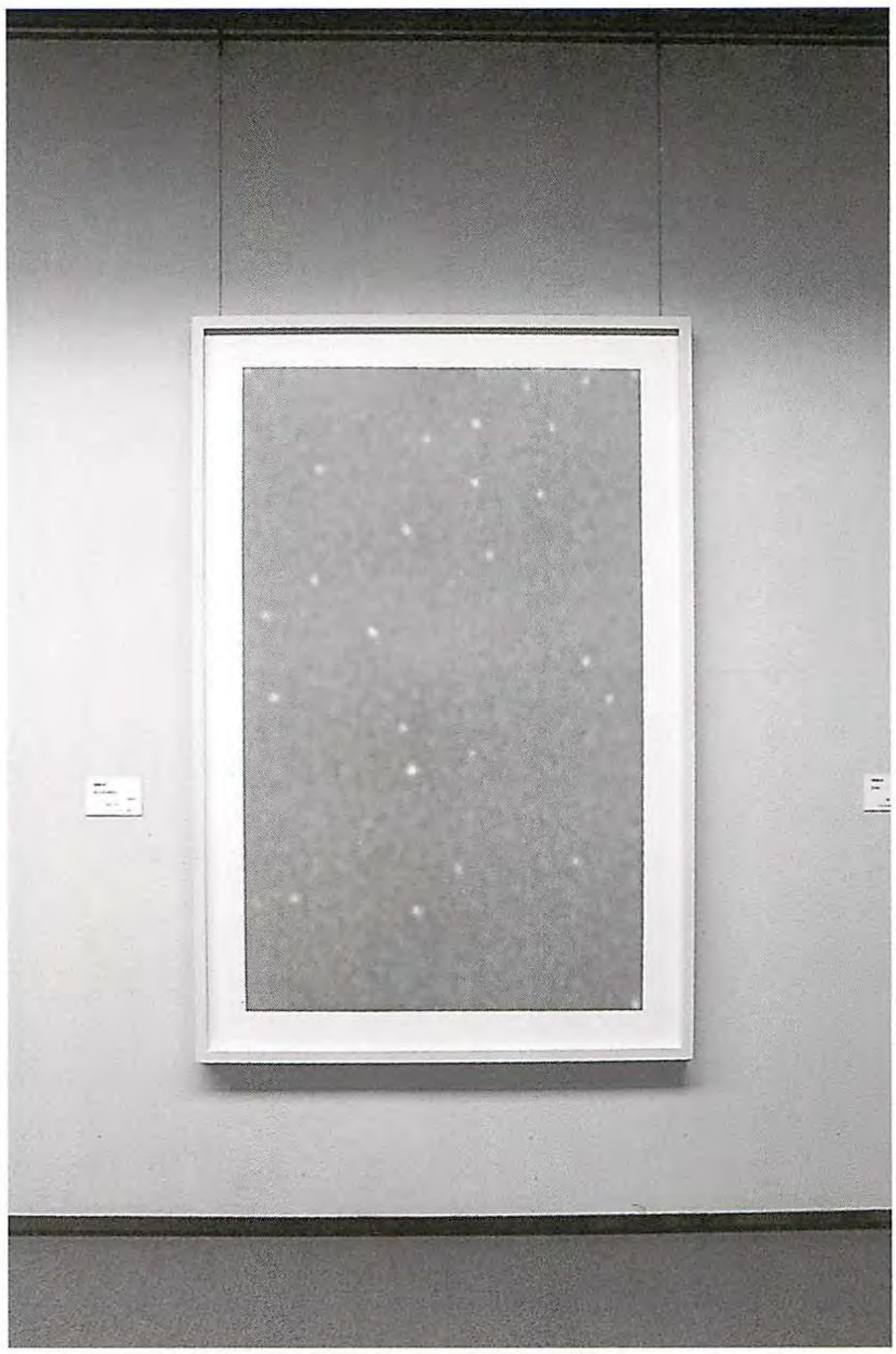
あまりに当たり前のことであるが、世の中のあらゆる事象は時間とともに常に動き、変容している。ひとつのところに留まる物事などどこにもない。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは変化の連続の中にいる。建物の壁が剥がれたり、錆でびっしりと覆われた機械。これら変化にさらされた堅固な構造物たちは、時間と共に肥大、あるいは磨耗していく。この時間による堆積は、それまでの現実を新たな現実の内部として内包することもあるし、過去の現実を表出することもある。私たちは常に新たな瞬間を目にし、それはまた二度と振り返ることはできない。こうした自然のあらゆる事象に立ち会うこと。それは私達が物事をつくったり発見したりすることと似たことではないだろうか。私の作品制作は、この事象の絶えざる変化への意識的立ち会いである。

作品は薄く何回も半透明のヴェールを繰り返し隙間なく重ねることによって成る。ヴェールにはメディウムで透明のドットやラインが描かれる。そこから見えるのは、以前にあった表面の姿、色である。私はこの作業を何度となく繰り返す。それらの行為は私の身体を通じ行われることである。しかし、幾度となく繰り返すことで私は作品の単なる媒体となる。自然の現象が世の中の様々のものを変容させるように、わずかずつ堆積していくヴェールによって表面が緩やかに変容する、重層化された時間感覚がそこにはある。私はただそれを身体を通じ何度となく繰り返し、わずかずつ描かれたドットやラインから隙間なく連鎖を紡いでいるにすぎない。

一枚の作品がそれ自体で完結することなど極めて稀なことのように思われる。刻々と変化するあらゆるものごとが過去―未来という時を内在させるように。表面からその向こうには幾重にも織り重なったいくつもの世界が内在している。そこからそれぞれの感覚、光、時間を取り込むことにより表出する姿がある。そこからみえるのはあらゆる方向にひろがる予兆としてのかたちではないだろうか。

個展会場風景（2005年　VOICE GALLERY pfs）

accumulation
ユポ紙、アクリル、シルクスクリーン
185.0 × 125.0 ㎝
2006 年



◆児玉太一

1978 年　京都府生まれ
2001 年　京都精華大学芸術学部造形学科版画分野卒業
2003 年　京都精華大学大学院芸術研究科造形専攻修了

個展
2002 年　VOICE GALLERY ／京都
2003 年　Nomart Project #02_08 ＜ accumulation ＞　Nomart Edition Project Space LOFT ／大阪
2005 年　VOICE GALLERY pfs ／京都
2006 年　ギャラリーヤマグチ・クンストバウ／大阪にて 10 月 21 日～ 11 月 11 日迄開催予定

グループ展他
2001 年　京展　京都市美術館／京都（'02、'03）
2002 年　Mixture　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2004 年　Works on paper 想画集 3　VOICE GALLERY ／京都
関西現代版画の開拓者と新世代たち「版画の力」　京都文化博物館／京都
Jahresgaben　Nomart Edition Project Space ／大阪
2005 年　現代版画の新世代たち in 倉敷　加計美術館／岡山
2006 年　京都府美術工芸新鋭選抜展　- 新しい波 -　京都文化博物館／京都
art in transit vol.9　ザ・パレスサイドホテル／京都

KOYANAGI yutaka

小柳　裕

制作活動について

さほど長い制作歴ではないが、それでもテーマを模索していろいろなことを試してきた。その中で、ともすれば理屈が先行しがちな私は、時々そうしたサイクルに疲れて、何とはなしに自分の好きなものを描くことがあった。近所の風景や手元にあったおもちゃ、置物等々。気に入りのものを、見ることでより深く手に入れようとしていたのだろうと思う。

いくつかのシリーズの変転のあとで、三年ほど前から続けている夜景のシリーズは、こうしたかつての「自分のための絵」の延長上にあるものである。これまでで最もコンセプト的に展開し、一番長く続いているということは、やはり自分の性質とモチーフが密接していたのだろうと思う。暗くなってからの帰り道、街灯や家々の窓の光に身をさらす時の、目に光が沁みこんでくる感覚。凝視するうちにか弱い輪郭を現す、物陰のささやかな事物。日々、ひっそりとよみがえっては消えていく夜の感触を、とどめて所有しておきたいという素朴な動機から生まれた夜景の絵画。いつかまた、違うものを描き始める予感はある。ただ、このシリーズで培いつつある自分なりのリアリティは、今後も大切にしようと思う。

リアリティ。納得のできる自分と作品との距離感、とでも言えるだろうか。作品には潔さが欲しい。世界と私の接点が作品である、という言い切り方に憧れながら、絵を描いていきたい。

playground
パネル、綿布、アクリル、油彩
123.0 × 160.5cm
2005 年
photo by　怡土鉄夫

Sluice
パネル、綿布、アクリル、油彩
直径　45 ㎝
2005 年

◆小柳　裕

1977 年　和歌山県生まれ
2002 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻（修士課程）修了

個展
2004 年　mori yu gallery ／京都
2006 年　KENJI TAKI GALLERY ／東京

グループ展他
1998 年　ターナー・アクリルアワード　　ギャラリー KURANUKI ／大阪、ギャラリーピアザ／東京
2000 年　京展 2000　　京都市美術館／京都
　　神戸アートアニュアル 2000　裸と被　　神戸アートビレッジセンター／兵庫
2002 年　Accretion Disc　　mori yu gallery ／京都
　　不死身の空間　　名古屋市民ギャラリー矢田／愛知
2003 年　黒の庭壱　　mori yu gallery ／京都
2004 年　VOCA 展 2004　　上野の森美術館／東京
　　黄色の庭弐　　mori yu gallery ／京都
2005 年　現代アートビエンナーレ西日本　　倉敷市立美術館、他／岡山
　　Fluid Drive　　同時代ギャラリー／京都
2006 年　MARCH part2　　KENJI TAKI GALLERY ／愛知

SASAKI Ken

佐々木健

「部屋の中のあらゆるものを窓から投げ捨てる。もう一度かき集め、またすべて投げ捨てる。それから町を練り歩く。」

1

行われた犯罪について考えてみる。昨日起こったささいな出来事でもかまわない。一通りの出来事を思い描こうとしてみると、似通った他の出来事と同じようにみえてくることがある。出来事はまた他の出来事とどこかで繋がり、どうやらいまだに継続しているようであり、時には新たな細部が発見され、それに伴って全体の色彩は大きく塗り替えられる。描き出すことをやめない限り出来事は終わりなく形を変え続ける。それは無数の色彩を持つエッジの見えないオセロゲームのようであり、そのなかをとりあえずの最良の認識と行為を選びとって進んでいく。

2

語りえないものに向かわないと話は始まらない。既知が限界なら、限界である既知からはじめてみる。それは些細な最弱な断片であるかもしれない。名状しがたい経験が、内容を盛り込まれ準備された経験より、魅力を放つ瞬間がある。断片が全く異質な全体を開くことがある。作品は内容の外部にある。

3

将棋の名手は途中から参戦しても時にすべてを覆す。制作において選択可能な一手は動かせる限りの物質の限界の上に無数に転がっている。名人は目の前の状況に発生している あらゆる可能性の中から次の一手を選択し、同時に他のすべての可能性を捨てる。

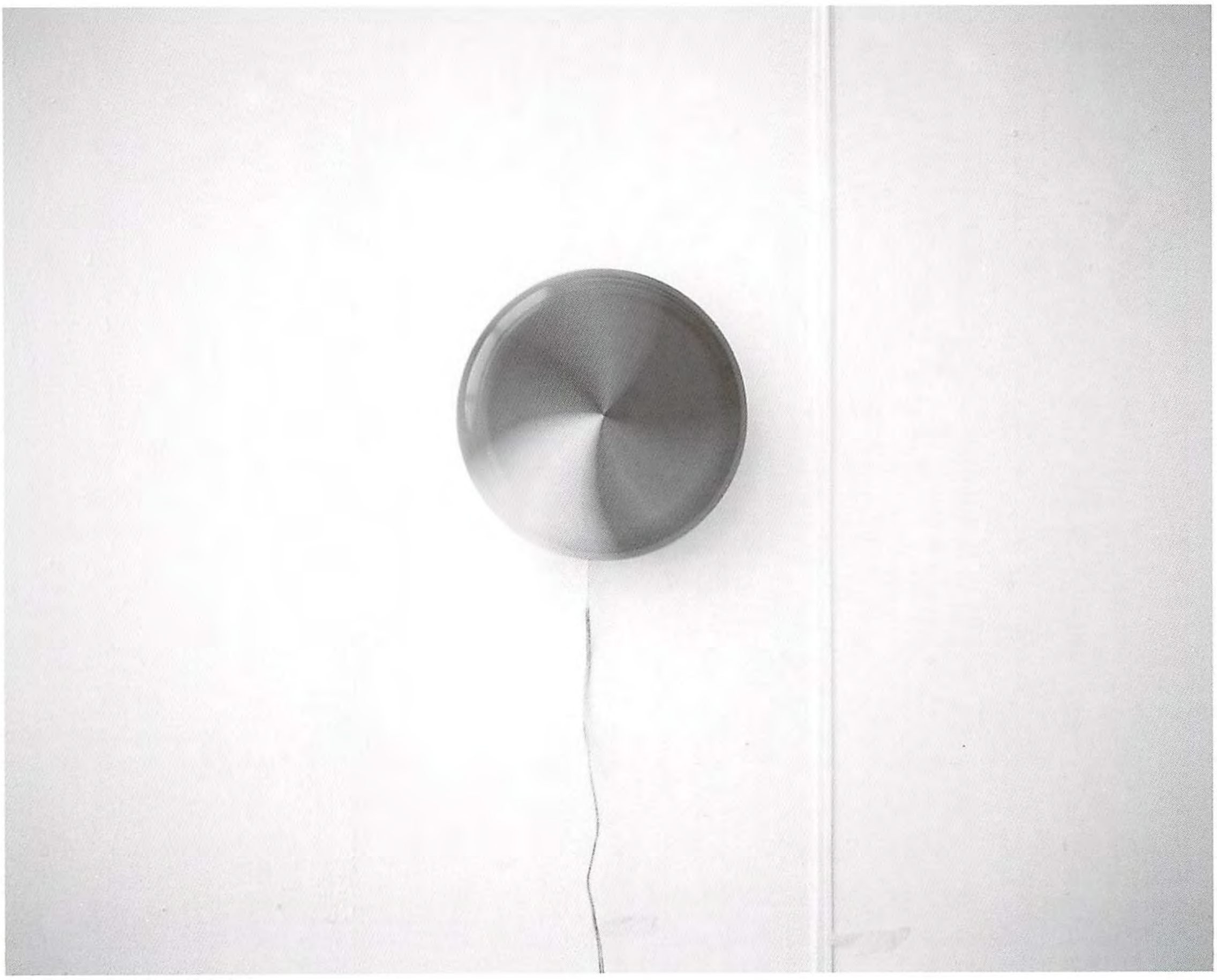
4

新奇さだけを求める制作は、身の回りに溢れているあらゆる色や形や状況をよそから借りてきて作品に取り込んだあげく、結局、世界そのものが一つの作品であったと発言するに留まって、魅力ある形式を何も生み出さないかもしれない。

5

いいところも悪いところも無数にあったりする。作ることによって徐々に問題が輪郭を描き、問題という輪郭を壊していく制作がある。それは経験の外にある小道を育

てていくようであり、徹底した弱さや諦観が作ることへ向かわせる。経験したい世界の予感があれば、鮮明に形を与えてみたいという衝動が生まれ、次はこうしてみようという判断が生まれる。



Disk
キャンバス、アクリル、モーター
直径 32.0 cm × 7 cm
2005 年

軍手
紙、アクリル
45.0 × 53.0 ㎝
2005 年

◆佐々木健

1976 年　神奈川県生まれ
2001 年　東京藝術大学大学院美術学部壁画科修了

個展
2005 年　秋山画廊／東京

グループ展他
2001 年　最悪展　東京藝術大学／東京
2002 年　旅潭展　東京藝術大学陳列館／東京
2004 年　conran show　OKADA STUDIO ／愛知
2006 年　「万物理論」THEORY OF EVERYTHING:VIDEO ART FROM TOKYO　Workstation Arts Center ／北京

SATO Maeko

佐藤万絵子

絵のなか／絵のそと

わたしは紙にゆびで描いています
紙は　薄く　その小数点以下数ミリメートルの厚みで　ときどき破けながら
わたしの描くものをひたすら受けとめています

わたしは絵の具にパステルを使います
パステルは紙に擦り込まれてゆきながら　静かに円筒の身を消失します

描いているときの、音
筆圧で紙が破けてしまう音
絵筆がわりのゆびのしたで、紙とパステルが擦れる音
わたしは耳を澄ますことに集中します
わたしのひく描線の、紙を傷つける音が　聴こえます

その音を聴き得たとき
わたしは、描いているわたしのゆびが、絵のそとに在ることを　知ります

わたしは、紙に擦り付いたパステルを見ます
描線で、けば立つ紙の繊維
パステルの色に染まり、よじれまるまった紙の滓

描いていたゆびを見ます
パステルの色に染まったゆびの皮膚
指紋の溝に留まる絵の具

in the picture/out of the picture, boat 1-5（会場風景）
和紙、オイルパステル
2005 年
photo by 柳場 大

そして、信じようとします
わたしが絵のなかにいたことを

わたしは絵のなかにいたことを　信じようとして、また描き続けます
けれども、どんなに描いても塗っても、
物質界にいるわたしは絵のなかにはいることはできないのです

絵に擦り込まれて　どんどん短くなってゆき、消失を果たすパステル
そのそばに
ちびりちびりとむかれたままに散り残る　パステルの包み紙に、わたしは似ている。

絵の具は物質であり、描くわたしのからだは物質であり、
わたしはこの物質の世界から　逃れられない
ならば　物質のわたしとして、絵のできるだけ近くへは行けないか？
この物質界で　最も絵の近くに在ることができる物質
それは、絵の具と　それを受けとめるもの

描くわたしも　呼ばれる名前を失い、ひとと繋がる五十音を失い、
描くための手と眼という物質としてだけ　ここに在ることができたならば　その一瞬
わたしは、パステルと紙と等しく絵のそばに、いることができるのではないか

そう、描線をひかれる紙の痛みを感じながら　絵のなかへ
そして　耳を澄ませ
絵のなかにいて　絵のそとに立てたとき、
見える景色は。

in the picture/out of the picture,boat 1
和紙、オイルパステル
122.0 × 23.0 × 13.0 ㎝
2005 年
photo by 柳場 大

◆佐藤万絵子

1975 年　秋田県生まれ
2000 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵コース修了

個展
2001 年　O ギャラリー TOP・S ／東京
2002 年　Space Kobo&Tomo ／東京
2003 年　Gallery FAL ／東京
　　Space Kobo&Tomo ／東京
2004 年　人形町エキジビットスペース Vision's ／東京
　　α M プロジェクト vol.6　佐藤万絵子展　　art space Kimura ASK?／東京
2005 年　Space Kobo&Tomo ／東京
2006 年　Space Kobo&Tomo ／東京

グループ展他
1998 年　デュッセルドルフ・クンストアカデミー×武蔵野美術大学　交流展「terminal」　武蔵野美術大学／東京
1999 年　同交流展「DJ」　デュッセルドルフ・クンストアカデミー講堂／デュッセルドルフ〔ドイツ〕
2002 年　「IMADATE ART CAMP 2002」　いまだて芸術館／福井
　　「IMADATE ART CAMP 2002 in TOKYO」　旧桜川小学校／東京
2003 年　「Jin Winter Session 2003」　ギャラリー人／東京
2004 年　VOCA 展 2004　上野の森美術館／東京
　　「ART CAMPER'S NOW 2004」　いまだて芸術館／福井
2005 年　群馬青年ビエンナーレ '05　群馬県立近代美術館／群馬
　　「Winter Session 2005」　Gallery Jin ／東京

SATO Yuko

サトウユウ子

制作について

私の絵画制作は、絵を描く以前から関わってきた音楽をたよりに、音の世界を描きとめたいという衝動がきっかけでした。

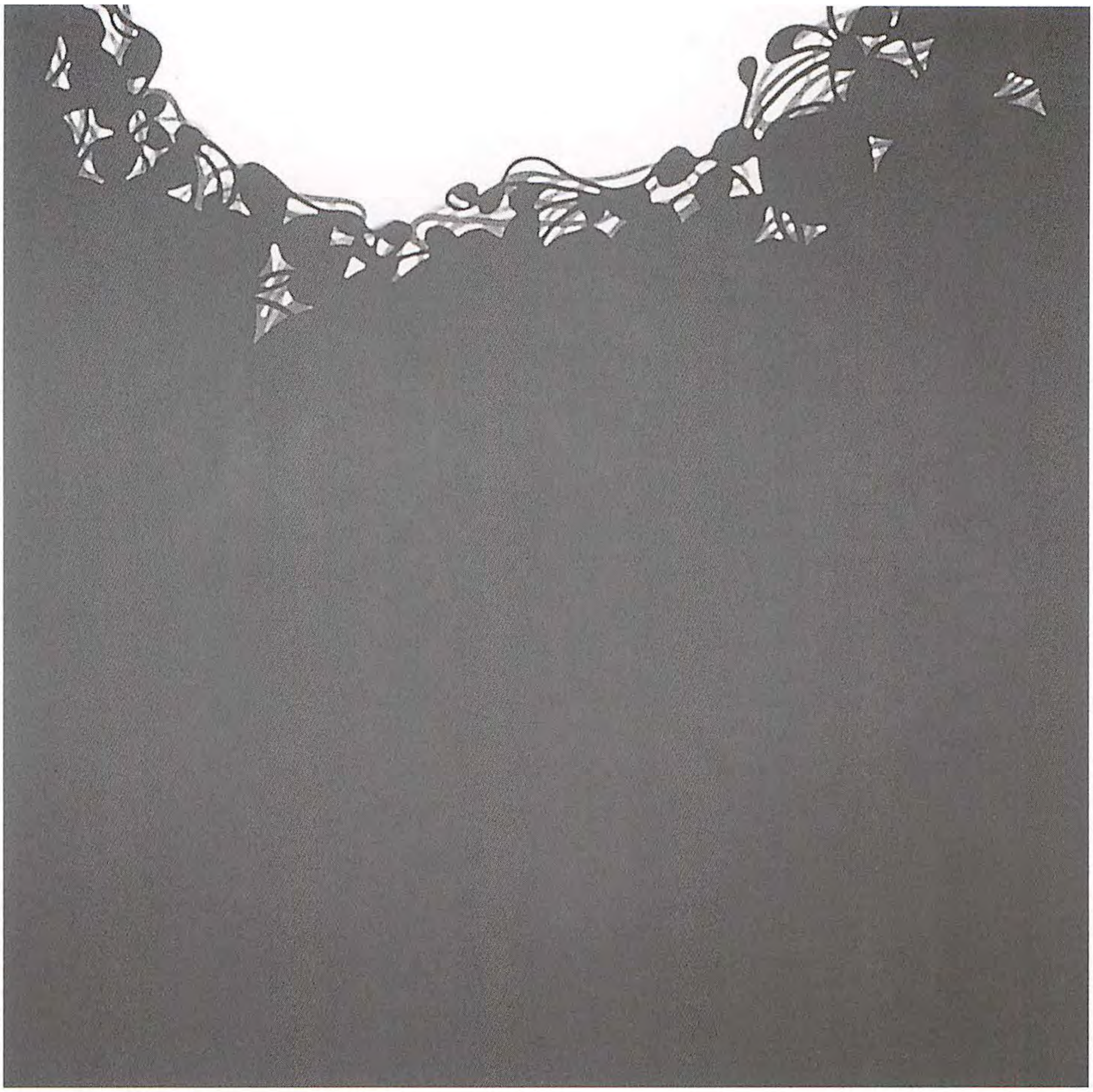
日常的によく聴いているキース・ジャレットやラルフ・タウナー、エグベルト・ジスモンチなどの即興演奏にみられる、ミニマルでありながら伝統的な音楽言語と今日の音楽言語の両方によって醸造された西も東もない豊穣な響きに共感しています。

そんな響きを捉えようと気の揺らぎのような茫洋としたタブローを描き始めましたが、描き進めるにつれ次第に音そのものから離れて、それらの音に共感する私自身の表現の生理と向き合うための場として描くようになっていきました。

この5年前くらいから描き続けている青い有機的な連なりによる画面の作品は、白地に青く丸いかたちを描いていくのではなく、全面が青く塗られたキャンバスを白い弧状で囲い込むことによって現れてくる青いかたちの相対的な関係によって生み出されます。

深夜のアトリエで、個人を超えたところにある「大きな流れ」を想いながら描くことで現れてくるこの青の連なりは、ある意味では私自身の感動の源泉であるアジアの宇宙観、自然観、生命観の反映かもしれません。

その有り様は、繰り返し現れてくるかたちが蠢いていくばかりで自分でも唖然としてしまいますが、それを自ずから然るべく、ありのままに表現していこうと思っています。



INNER LIFE 050818
綿布、アクリル
122.0 × 123.0 cm
2005 年

INNER LIFE 051101
綿布、アクリル
60.0 × 60.0 ㎝
2005 年

◆サトウユウ子

1969 年　福岡県生まれ
1989 年　国立音楽大学教育音楽学科 I 類中退
1997 年　武蔵野美術学園彫塑科修了

個展
2000 年　那覇市民ギャラリー／沖縄
2001 年　INNER LIFE 99 → 01　TOR GALLERY ／兵庫
2002 年　INNER LIFE 01 → 02　銀座小野画廊／東京
2003 年　INNER LIFE 01 → 02　前島アートセンター／沖縄
2005 年　INNER LIFE 05　ギャラリー・ラファイエット／沖縄
2006 年　ギャラリー椿 GT2 ／東京（京橋）にて 7 月 3 日～ 8 日迄開催

グループ展他
2000 年　第 5 回昭和シェル石油現代美術展　目黒区美術館／東京
2001 年　第 4 回川の絵画大賞展　加古川市総合文化センター／兵庫
　　第 7 回現代美術小品展　銀座小野画廊／東京
2002 年　第 8 回現代美術小品展　銀座小野画廊／東京
2003 年　代官山アートフェア 2003　ヒルサイド・フォーラム／東京
2004 年　前島ライブラリ＆ショップ vol.3　前島アートセンター／沖縄

SENGOKU Hiromi

仙石裕美

今そこに在る　空　花　匂い　ことば　愛しい人たち。
過ぎ去ったもの、過ぎていくもの、過ぎ去るであろうものたち。
それらは　わたしを、すっかり嬉しくさせてしまい、そしてまた、憂鬱で不安にしてしまう。
そんな時　絵を　描く。
ひとつひとつの瞬間　を　私だけの　額縁の中に、しまいこむ。
ひとりひとり　を　ひとり占めに、たくさんの　賛辞と　質問をなげかける。
そうしているうちに、たとえ　目の前を過ぎてしまっても、
それらは　そこに　在る、と思えたりする。
そして　わたし自身も　じつは、ひとところにはとどまらず　どこかへ、過ぎつづけている
ものだという事に　気づく。
それは　わたしを、不安にするが、また　こころ踊るように　嬉しくさせてくれる。
そんな　ふうに　絵を描いていく。

板、油彩、造花、ドット柄チュール
54.0 × 43.0 cm
2005 年

綿布、刺繍糸、針、アクリル
150.0 × 115.0cm
2006 年

◆仙石裕美

1982 年　埼玉県生まれ
2004 年　武蔵野美術大学油絵科卒業
2005 年　武蔵野美術大学大学院中退
2006 年　Ecole National Superieure des Beaux-Arts　在学中

グループ展
2002 年　雨海商店　SPICA MUSIUM ／東京
2003 年　日テレ．アートマーケット　日本テレビビル／東京
2004 年　DETEN　青山スパイラルガーデン／東京
2004 年　Realism 展　NICHE gallery ／東京
2004 年　ART BOX 大賞展　入選者作品展　ディックスカラースクエアギャラリー／東京
2004 年　東京コンペ　入選作品展示　丸の内ビル／東京

TADA Yumiko

多田由美子

daily method

9月11日「傘がない」を聞く。「…だけども問題は今日の雨　傘がない／行かなくちゃ　君に逢いに行かなくちゃ／君の街へ行かなくちゃ／雨にぬれ」テレビでは自民圧勝を告げ、再び戦争の足音を聞く。立候補者達の明解すぎる短いフレーズの空虚な連呼が、この部屋の隅々までクレゾールの無気味な液体のように満たしていく。今日も些末な問題とささやかな障害と、ところてんのように押し出されてしまった日常に追われる。それは金太郎飴のように同じような絵柄の微妙に違った側面をもち、どんよりと甘い。夜中のテレビの画像は妙なリアリティをもち、当選を喜ぶ人々からバラエティに変わっていった。虚なリアリティを具現化したものが、傍観者であろうとする私を取り込もうとする。それはつまり、私がテレビというものを見ているのではなくて、ものであるテレビに見られているのか。私は身を起こし、ゆっくりと抵抗してみる。私の呼吸と動作が生み出す音が冴え、ノイズの中の静寂に取り込まれる、現実の裂け目がぽっかりと口をあける。

テレビの中からはみ出た政治のシビアな現実も(それは多分に演劇的であるにもかかわらず)、自分が存在する部屋も私を囲む風景も、それぞれ確かに存在を主張しながら、あちらこちらに偏在し、別の物語を紡ぐ。例えば、インターネット上で、次から次へと起ち現れる情報の悲劇も喜劇も一緒くたになった、浅薄な明るさの中で紡がれるそれぞれの物語は終わりを目指さない。それでもしかし、時に、現実の見せる鮮やかな一瞬は訪れる。しかもあくまでも一瞬であって、持続的なものではなく、うっかりすると見のがしてしまいそうな現実の裂け目。見てはいけないものを見てしまったような怖れと、得体の知れない個を超えた感情、時間の概念を突き崩す深いため息にも似た叫び。「ものの　あはれ」と声に出して言ってみる。現実の時々見せるそれに捕われ、捕われることによって逡巡しようとする自分にまた戸惑う。

日記のように制作する。それはもちろん、自己肯定のための道具ではなく、日々起きている社会的な事象や身の回りの出来事について書き留めるための記録の一部と

して考えたい。ドローイングや言葉などの形を成すこともあるが、往々にして目に見えない感覚や感情であったりし、形にならないものであることも多い。そうであるにもかかわらず、それは確実に更新され、蓄積され、そして澱のように溜まっていく。だからより具体的に見えるような形にしたいという欲求が生まれる。ただし、そうして出来てしまった作品と私との関係は、実に不安定なものだ。作品は私であって私でなく、作者さえも予想できない客観的な「もの」だ。それでも出来るだけ生命力のある「もの」に出会いたいと、見えない到達点に向かってレッスンは続く。

そして、実際、私を取りまくものは、交わす人と言葉の群れ、過ぎ行く人々も、身の回りに溢れかえるものも、テレビやパソコンの仮想空間ですら等価の情報として示され、均質化した空間を漂う。ここ数年、風景の中の座標軸のようなものを想定して自分の立ち位置を確認するようになった。例えば私の足下から立ち上がり、私を取りまく可視空間を広義の意味での風景と呼ぶなら、その中であえて私が見ないもの、見えないものがあって良い。それは、私というフィルターによって選択されることで、パーソナルな断片として関係性や個別性が露見する。断片から断片へ、ちりばめられた手がかりや名残りのようなものを回収しながら、様々な事柄を想起し、イメージを入れ換えることを可能にする。それはなお、均質化された空間の中で各々のリアルを引き起こす開かれた装置として機能し、関係を紡ぐものとしてそこに在る。

私は泣いたりしない
キャンバス、油彩、オイルバー
162.0 × 97.0 ㎝
2005 年
photo by　中川達彦

個展会場風景（2006年）
左から：私は泣いたりしない／淡く美しい日々の記憶は／涙の果ての雨となって／とどまりつづけるから
キャンバス、油彩、オイルバー
左から：162.0×97.0㎝／162.0×97.0㎝／72.7×72.7㎝／162.0×97.0㎝
photo by　中川達彦

◆多田由美子

1965年　東京都生まれ
1988年　宮城教育大学教育学部美術科卒業
2004年　International art colony 参加の為マケドニア短期滞在

個展
1999年　宮城県美術館県民ギャラリー／宮城
2001年　宮城県美術館県民ギャラリー／宮城
2002年　ギャラリー青城／宮城
2003年　宮城県美術館公開制作及び公開制作展／宮城
　　トキ・アートスペース／東京
2004年　トキ・アートスペース／東京
2005年　トキ・アートスペース／東京
2006年　ギャラリーなつか／東京
　　トキ・アートスペース／東京（青山）にて11月20日～12月3日迄開催予定

グループ展他
2002年　日韓現代美術交流展　せんだいメディアテーク／宮城
　　韓日現代美術交流展　DongA art gallery／韓国
2004年　Asia Women of art exhibition　Soniu gallery／韓国
　　International art colony exhibition　Cultural information center／マケドニア

NAKAOKA Masumi

中岡真珠美

作品について

屋根や橋に切り取られた空を出来るだけ垂直に見上げると、そこには奥行きや上下をなくし、密度を変え伸び縮みしているうつろいがある。
それは広い空で見る様とは違った引き込む力を持っているように感じます。

私がモチーフにしているのは、広大な山のようにそこに視点を置かずとも、あり続けるもの（自然）ではなく、自身が介入して発見・知覚する空間の事象（ランドスケープ）としての、「風景」を選んでいます。
それらを写真に撮り、形に置き換え画面に移していく。
それは選びとったものに対するその時の再現ではなく、風景という具体的な形を借りて必要な要素のみを選び、排除・誇張しながら最終的な形を紡ぎ出す行為です。
それぞれの風景（かたち）の中に自分だけのルールを作るというか、線引きをして過多過少にならない間で一手一手、筆を進めていきます。
〝ここまでは許せてここからは許せない〟という境目はとても微妙ですが、確実にその線は存在します。
その微妙なあたりを探る緊張感がたまらなくいいのです。
それはヒストリアソビ的行為かもしれません。
作品が個人的感覚の結果だけとして閉じてしまわないように、自分の予想の範囲からはみ出たところの許容がどこまでなのかを常に探っています。

bamboo drape
キャンバス、油彩、アクリル、カシュー
105.0 × 110.0 cm
2005 年
photo by O ギャラリー eyes

カドザキ
キャンバス、油彩、カシュー
23.0 × 24.0 ㎝
2005 年
photo by　O ギャラリー eyes

◆中岡真珠美

1978 年　京都府生まれ
2004 年　京都市立芸術大学美術研究科絵画専攻（油画）修了

個展
2004 年　O ギャラリー eyes ／大阪
2005 年　O ギャラリー eyes ／大阪
　　project N　中岡真珠美　　東京オペラシティアートギャラリー・コリドール／東京
2006 年　O ギャラリー eyes ／大阪

グループ展他
2002 年　vector12　　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2003 年　APT CANP in CASO　　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
　　Tourbillon　　O ギャラリー eyes ／大阪
　　ART UNIV.2003　　大学コンソーシアム京都／京都
2004 年　神戸アートアニュアル 2004　　神戸アートビレッジセンター／兵庫
　　UI　Wang 一国際プランカードアート 2004　　イワン市 pegun 湖岸／韓国
　　Unnatural Ⅱ　　O ギャラリー eyes ／大阪、O ギャラリー／東京
2005 年　第 1 回倉敷現代アート・ビエンナーレ　　倉敷市立美術館／岡山
　　TAMA VIVANT 2005　美術・そのひろがる輪郭　　多摩美術大学／東京、みなとみらい駅コンコース／神奈川
2006 年　Drawing-Exposed essence　　O ギャラリー eyes ／大阪にて 12 月 11 日～ 16 日迄開催予定

HASHIZUME Sai

橋爪　彩

「スカートの陰」

スカートの陰にあるもの。
まずは彼女達の発展途上の美しさ。
柔らかな布地に隠した、したたかな願望。
文字通りつま先立ちなピンヒール。
あらわになった皮膚の何と無防備なこと。
そして、厚さ数ミリの生地に守られた彼女達のセックス。

私達は彼女達のスカートの陰にあるものに常に興味を持っている。
彼女達もまた、自分や自分以外の少女達のスカートの陰にあるものが気になって仕方がない。

彼女達はとても慎重にスカートを選ぶ。
自分の欠点を隠し、より魅力的にしてくれるスカートを時間をかけて探し、手に入れる。
だからこそ、そのスカートの陰に私達は彼女達を見ることができるのだ。

ここで語られる「彼女達」とは特別な存在ではない。
私により瞬間を切り取られた彼女達は、頓着しない素振りを見せながらも確実に毎秒を女性として生き、大胆繊細な生を誇示し、無邪気さの中に邪気を忍ばせている。
そして彼女達とは、ある一定の精神的肉体的年齢の女の子達を指していて、それ以外は国境や肌の色、時間軸も全て軽々と飛び越える普遍的な存在である。
それを受け、私の描く対象は皆一様に匿名で無名で、どこにでもいるありきたりな女の子である事が必要だ。
私の最近の制作ではほとんど上半身が登場せず、下半身のみが表現されている。上半身の中でも主だって他との区別や個性を主張する顔という特定的なシンボルを奪い、見手に余分な情報や興味を与えないためだ。

先の内容を美術で表出させていくと言う事は、決して私の少女時代へのノスタルジーを画面上でなぞっていく行為の事を言わない。日常的にメディアなどを媒介に表面的な事ばかりが取り沙汰され不可視になったものを、体積を持たせることで曇りなく表

示したいのだ。
曖昧な物が輪郭を持ち、眼前に表れた時の
大きな感情の振れが、私の思う美術の面白
さであり、目指す作品の姿だ。

slowly,faster
パネルに白亜地、油彩
91.0 × 72.7 ㎝
2005 年

身勝手
パネルにジェッソ、油彩
38.0 × 45.5 ㎝
2005 年

◆橋爪　彩

1980 年　東京都生まれ
2006 年　東京藝術大学修士課程絵画専攻（油画）修了
　　文化庁平成 18 年度新進芸術家海外留学制度・研修にてドイツに留学中

個展
2004 年　ギャラリーエス／東京
2005 年　ギャラリー本城／東京

グループ展他
2000 年　その人までの遠近法　下高井戸 gallery art soko ／東京
2002 年　四人展　東京藝術大学学生会館／東京
2003 年　0 号展　トーキョーワンダーサイト／東京
　　トーキョーワンダーウォール公募 2003　東京都現代美術館／東京
2004 年　オトメ会議　ギャラリーエス／東京
　　Space ＝ Passage 展　O ギャラリー／東京
　　トーキョーワンダーウォール公募 2004　東京都現代美術館／東京
　　敏感肌展　ギャラリーアートポイント／東京
　　シェル美術賞 2004　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2005 年　四つの視点　ギャラリーアートポイント／東京
　　α M プロジェクト Vol.2「secret girls ～ up & down」　artspace Kimura ASK?／東京
　　ワークショップ「Here & Now 2005」　スコキ・シュロス／スコキ[ポーランド]
2006 年　VOCA 展 2006　上野の森美術館／東京

FUJITA Mari

藤田真理

作品は普段生活をして自分の中に蓄積し残ったものを形にしている。

情報や時勢・人間の五感から得るもの・体験・活動したもの等など。

それらは眼や耳をとおり振り分けられ、そのときの自分の許容量に応じ、適切に収まって蓄積されてゆくもので、良くも悪くもリアルタイムの自分が作品に現れると考えている。

そして繰り返しの自己確認作業。

人と出会い社会に出て、それらを咀嚼し自己の中に取り込みつつ、活動を継続してゆきたい。

それは例え些細なことであれ、自分に反映されるからである。

結果を求めた行動でなく、そのことから後に残ったものが自分にとっては大事である。

惑星
新聞紙、樹脂粘土、アクリル、ジェッソ
100.5 × 35.2 × 16.0 ㎝
2005 年
photo by　小園井常久

「惑星」の部分
photo by　小園井常久

沈黙ー表出
木材、樹脂粘土、アクリル、ジェッソ
24.3×30.0×22.0㎝
2005年
photo by　小園井常久

◆藤田真理

1971年　北海道生まれ
1998年　多摩美術大学大学院美術研究科油画専攻修了

個展
1997年　六義園画廊／東京
1999年　Gallery ARK／神奈川
2001年　クレセール・アートバーグ／北海道
2003年　ギャラリーたぴお／北海道
2004年　大同ギャラリー／北海道
2005年　ギャラリー　ミヤシタ／北海道
2006年　ギャラリー　ミヤシタ／北海道（札幌）にて11月16日～12月3日迄開催予定

グループ展他
2000年　450 BROADWAY GALLERY／ニューヨーク
2001年　VISION展　　クレセール・アートバーグ／北海道（'02）
2003年　絵画の場合　　北海道浅井学園大学学術情報センター、ポルトギャラリー／北海道（'04、'05）
　　3人展　　ICF教会／北海道
2005年　きのとや大丸札幌店／北海道
2006年　小品展　　ギャラリー　ミヤシタ／北海道

HOSOKAWA kenichi

細川憲一

エッセンスとしての絵画

偶然の産物ともいうべき形象が痕跡として油膜に植え付けられ、残される。はじめは単なるシミのようでもあるが、絵の具は幾層にも塗り重ねられた画面として、ありつづけるうちに空間を司る存在へと変貌してゆく。そこには、ある種の感情が内包されており、画面の奥から立ち上がってくる〝予期〟あるいは〝希望〟といった感覚を想起させる。

樹脂を絵の具と混ぜることで生まれる身体にも似た質感は、独特の存在感を醸し出す。まるで水面に広がる波紋のように私の空間のイメージはさらに膨らみ、深度を増していく。

埋設されていた記憶の断片と再びアクセスを可能にするのは、それを呼び醒す暗号ともいうべき存在が画面に浮かび上がってきた時だ。刃物で削り出すような慎重さと、時には衝動的ともいうべき行為によって、それら痕跡を辿り始める。描き留めたいものが焦点も合わせないまま、通り過ぎてしまわないように、ある到達域を超えるための試みを繰り返す。

色彩と形象が絡み合い、次々と現れてくる中で、ある時を境に私は、風に孕んだ帆のように、ぐんと絵の世界へ引き込まれる。それはまるで体の中で何かが共鳴しているような感覚であり、終わりというより、何かが始まる時の輝きを感じさせるのだ。これはきっと、いつの日か絵画として引き上げられることを確信していた記憶の断片と現実の自分とが繋がり出した証なのかもしれない。

制作と作品に関して

以前、地塗りした板に油絵の具で描いたことがあったが、画面から拒まれたような気がして、止めてしまったことがある。〝拒まれる〟とは、ちょっと大げさな言い方だが、以来作品には自分で張ったキャンバスを使っている。きっと制作の方法が関係しているのだと思うが、色々試してみた結果、今はこのスタイルに落ち着いている。

この描き味というものは、まったくの好みだと思うのだが、作品を描き続ける場合、非常に重要なものになってくる。木枠に張ったキャンバスは、見方を変えれば宙

に浮いたような状態にある。無重力ではないが、その適度な弾力はブラシやナイフをしなやかに受け止める。こちらからのアクションを受けとり、またそれに応じて返してくるような感触は、私にとってその弾力が包容力となり、板とは決定的に違う心理状態で絵を描いているのだと思う。

一方、キャンバスを張る作業は、黙々とした手作業で、ただただ皺やゆがみができないように、好みの張り具合に仕上げていく。そうした単純作業は自然と気持ちが落ち着くし、また同時に創作への集中力がおのずから高められている気がする。少しずつ弓を引き寄せ、一気に矢を放つような、そんな気持ちにもさせてくれるのだ。作業の途中、白くてしなやかなキャンバスを眺めながら、もうすでに絵は始まっていて、それは静かに動きだしているかのようでもある。

おおよそ一枚の作品ができあがるまでに絵の具は十数回、描き重ねられているはずである。乾かして描く、あるいはそれぞれの色を溶かし込むようにウェット状態でも重ねて描いたりする。重ねる回数にこだわりはないが、やはり絵をまとめるのに必要な醸成期間というものがあるようだ。描き終えるまでの期間はその作品のことを、心のどこかで考えながら、ずっと繋がった状態でいることになる。したがって、私の絵には、その時期に感じていることが大いに映り込むに違いない。

制作では描き重ねる度に画面が大きく変貌していく。当然、現れては消えていく形があり、または、ある形が浮かび上がってきて、どんどんと存在感を増していくこともある訳である。私の場合、いってみればこの偶然の、この曖昧さの中に絵の面白さが多分に含まれていると感じているのである。そして同時にその中から、掬い取ったものへの必然を噛みしめながら現実の、こちら側の世界に留めようとするわけである。そこでは画面に一定量の絵の具による、身体的、精神的一体感を感じ取ることができるか否かの感覚が頼りになるのである。

ある段階で画面の雰囲気が気に入って、それをそのまま上手く継承しようとする時がある。しかしながら、描き進めるうちに何かしらひずみのようなものが見え隠れしてきて、あれこれと手を尽くすものの結局、生気を失った抜け殻の作品になったりする。描きながら時としてこんな落とし穴にはまり込むことがあるのだ。こんな時、肝心なのは多少の危険を感じながらも一歩踏みだそうとする強い気持ちを持つことが必要なのだろう。創作とは常にそうした姿勢が求められているのである。結果的に、絵の勢いや力強さ、生命感といったものはこうした層を突き抜けてきたものが獲得していくのだろうと思う。

私にとって、絵は常に未完成である方がよいと思う。もちろん、完成とする手応えを持って絵は描き終えるのだが、ここでいう未完成の意味とは、新たなインスピレーションを引き起こしてくれる可能性に満ちた画面という意味である。荒削りというか、野性味というか、図太く、のうのうとしていて、力強い、そんなところに自分の絵の可能性が潜んでいる気がするし、そういうものを描くことが理想でもある。時として、上手さばかりの絵は脆くて、気付いた時にはすでに先細りした絵になっている

時もある。私にとっての絵は、この先描き続けられるテーマであって欲しいし、これからも新たな活力を生み出すものであって欲しいと思っている。

Trace　蜜林
キャンバス、油彩
194.0 × 162.0 ㎝
2005 年
photo by　末正真礼生

◆細川憲一

1968 年　埼玉県生まれ
1992 年　岩手大学教育学部特設美術科卒業
1995 年　上越教育大学大学院修士課程教育研究科芸術系コース美術修了

個展
2004 年　コバヤシ画廊／東京
2005 年　コバヤシ画廊／東京
2006 年　コバヤシ画廊／東京（銀座）にて 9 月 11 日～ 16 日迄開催予定
N.E.blood21　リアス・アーク美術館／宮城（気仙沼）にて 9 月 20 日～ 10 月 22 日迄開催予定

グループ展
1997 年　境界／分裂／流動　ギャラリー青城／宮城
2004 年　リアス・アーク美術館開館 10 周年記念展　リアス・アーク美術館／宮城
MESSAGE 2004　コバヤシ画廊／東京
2005 年　MESSAGE 2005　コバヤシ画廊／東京

MORIMOTO Gen

森本　玄

「光の器」

コップに水を注ぐ。ガラスと水はいずれも視覚的に透明だが、それらはまた触れることの出来る確かな物体である。溢れるぎりぎりの所まで一杯に満たすと、表面張力によって水はレンズ状になって光を集める。ガラスと背景の境界は、ある部分はとけ込み曖昧に見え、他方では周りのものを映し強いコントラストを生じる。

かつてレオナルド・ダ・ビンチはスフマート（ぼかし技法）を駆使して形態の輪郭線を消し去り、光と闇のせめぎ合いによって存在の不可思議を絵画化した。昼夜を分かたずに蛍光灯が輝く現代に於いて、スフマートはまだ有効だろうか。

水は緩やかに蒸発して、描いている間にもコップの水位は下がっていく。また、制作途中の絵画の表面からも揮発性油が蒸発し、絵の具の内部では酸化重合が進行している。私にとって油彩の乾燥速度はグラデーションの出来方を左右する、大変重要なことである。不透明な絵具層と透明色のグレーズの重層効果により、コップの形態は背景にとけ込み、また際だち、という繰り返しのなかで揺らぎながら「絵画」として存在させたい。

コップを洗い、新しい水に替える。描いている最中であっても、思いついたときに。出来るだけきれいな水を描こうと思う。一口、含んで飲んでみることもある。かくして描いているモチーフは同じようでいて常に新しく入れ替わっている。私が描いている水はコップ一杯の水だが、それは同時にイデア的な水でもある。

時間の経過と、それに伴う変化を包含しながら同一の平面上に描き留める絵画は、光の状態の一瞬を記録する写真と本質的に異なっている。そして、例え対象を目の前に置いて描写しているつもりでも、それを描いているときには、画面上に置かれた絵の具が、筆さばきによって刻一刻変化している状況に立ち会うばかりで、既に対象そのものを見ていない。網膜、もしくは脳に生じた残像をキャンバス上でトレースするとき、「描く」という行為の裡には、対象を単に写す以上の何かが介在すると考えられる。それ故にこそ、ラスコーなど先史時代の壁画以来、連綿と続いている「描く」と

いう単純なこの行為が、〈絵画は死んだ〉と言われてもなお繰り返されているのではないだろうか。

古くなった水を庭に撒く。その後、その水は植物に吸収されたり、葉や地面から蒸発しながら、空中を彷徨い、やがて雲になり、雨となって再び大地に降り注ぐだろう。

水の循環と、精神の循環は相似であるというイメージが浮かんだのは学生の頃、銅版画のモチーフ取材で行った神島から伊良子岬を望んだときのことだった。頭上は晴れているのに、遙か遠くの海上で厚い灰色の雲から、雨が幅広のカーテンのように降り注いでいた。そのとき、私は水のさまざまな様態の一つである「雨」というものの全体を、外側から見ることが出来たように思った。

難解な哲学書を読んでいるときも、じっと集中していると、ときどき自分の考えていたことを代弁してくれるような文章に出会うことがある。全貌は理解できなくても、部分的にでも先達の思想を「そう、その通り！」と共有できる瞬間の喜び。これは海面で太陽熱によって蒸発した水蒸気が上昇し、上空で冷却されて雲となり、さらに雨となって見えることと同じではないか。つまり、眼で見ることの出来ない水蒸気だった水分子が、雲や雨に変わることで、視覚的に認識できるものになるのである。言葉を構成する最小単位の文字が集まって単語となり、センテンスとなり、ある考えを「表明」できるテクストになるように。

雨のもたらすもの。表現とは目に見えないものをかたちにすることであり、それが文章であれ、絵画であれ、あるかたちにするには相応の熱量を必要とする。古来より人間は、それぞれの生のエネルギーの幾ばくかを考えることに費やし、また物質に込めることでさまざまなものを創り出してきた。そうして残された先人達の知恵を受け継ぎ、発展させること。時間の経過と人間の様々な営みを直線的ではなく、円環、もしくはスパイラルの動きとしてイメージすると、個の時空間よりもっと大きな、種としての生命のパラダイムが開かれてくる。「光の器」とは、ひとの精神的な営みのメタファーであり、また表面で光を反射して知覚される「絵画」そのものでもある。

between sky and earth
キャンバス、油彩、写真
112.0 × 145.5 ㎝
2005 年
photo by　森宮英文

◆森本　玄

1964 年　三重県生まれ
1995 年　東京藝術大学博士後期課程修了

個展
1994 年　M material-method　東京芸術大学陳列館／東
1995 年　肌理の海　クレイギャラリー ／東京
1998 年　"Paintings"　On Gallery ／大阪
2003 年　受容　ギャラリー恵風／京都
2006 年　"between sky and earth"　ギャラリー 16 ／京都

グループ展他
1989 年　現代日本美術展　東京都美術館、京都市美術館／東京他（ '91、'92、'94）
第 14 回全国学生版画展　町田市立国際版画美術館／神奈川（'90）
第 4 回中華民国国際版画ビエンナーレ展　台北市立美術館／台湾
1990 年　第 1 回高知国際版画トリエンナーレ展　いの町紙の博物館／高知
1991 年　第 19 回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展　リュブリアナ近代美術館／旧ユーゴスラビア
Made in Japan 展　Aberdeen Art Gallery ／スコットランド
1995 年　Prints of the Far East 展　Bielsko-Biala ／ポーランド
第 1 回ソフィア国際版画トリエンナーレ展／ソフィア〔ブルガリア〕
1996 年　現代日本の視覚展　三重県総合文化センター／三重（'97）
第 11 回ドイツ国際版画トリエンナーレ展／フレッヘン〔ドイツ〕
1998 年　岩手アートフェスティバル UK'98　Affinity　ギャラリー彩園子／盛岡
1999 年　第 4 回昭和シェル石油現代美術賞展　目黒区美術館／東京（'01）
2001 年　津西高校第 8 回「絵画の流れ」展∞【やわらかな結晶】　三重県立美術館県民ギャラリー／三重（'82 第 2 回展～毎年）
2003 年　インディペンデント CASO 展　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
京都・洋画の現在　京都文化博物館／京都
2004 年　とよた美術展 '04　豊田市美術館／愛知
2005 年　中径展Ⅳ～ think ahead　府中市美術館市民ギャラリー／東京
シェル美術賞 2005　代官山ヒルサイドギャラリー／東京
2006 年　中径展Ⅴ～ think ahead　府中市美術館市民ギャラリー／東京(府中)にて 8 月 8 日～ 13 日迄開催予定
2007 年　the Next Stage 翔展　井上画廊／東京（銀座）にて 3 月 12 日～ 17 日迄開催予定

YAMADA Ayako

山田彩子

旅への確信

嫌になるくらいに私の体は旅に向いています。

旅を求める気持ちは、人間に本能として備わっているものなのでは、と感じます。私にとってはそうであるとしか言いようが無く、それは食欲やその他の一時的欲求がそうであるように、歯止めが利かなくなる時もあります。それは自分でも嫌になるくらいの欲求です。

誰も知らない街に独りきりで目覚める緊張に大きな喜びを感じてしまう。

帰れない。そのことが苦しく愛おしい。始めた責任と終わりの瞬間を見つけるまでの興奮と快感が私を動かし続ける。

遠く遠くはなれた場所で人を想い、今在る自分と周りの存在を喜ぶ。

その不思議。

時を経てはじめて蘇る想いの大きさによって、意味付けられていく小さな偶然。

自分とは圧倒的に異なるものを受け入れる瞬間の諦めとそれに伴う快楽。

遠すぎる場所で見つけてしまう記憶の中と同じにおいが、記憶と連動して新たな体験を作り出します。

求めていたけれど、予想外の瞬間に出会ってしまう圧倒的な風景。名所旧跡、奇岩怪石を目指しながら、道に迷った脇道で待つ、そのさりげない瞬間。

それらは背筋で感じるような瞬間で、私が捕まえる瞬間達は決して嘘をつきません。

光の渦から目を離せない。時間はもう存在しない。

待つことも、離れることも、急ぐことも、全て無意味に、大きな流れだけが旅の終わりを教えてくれます。

その終わりの瞬間に気付くまで、逃さないように悪あがきをするけれど、必死で目を凝らすけど、結局同じことで初めから出会えるものなんて決められているように思います。それでも前を見ていなければ進まなければ終わりを捉えられない。

そして、出会えたものの衝撃に重さに暖かさに軽やかさに幸福感に儚さに、そのどうしようもない存在感に、苦しくなるのです。

すべては私が見つけた気がしているけれど、そとから与えてもらったもの。

物理的な旅の終わりの後の幸せで張りつめた待ち時間。

終わりを知って、絵で語りだすまでの待ち時間。

旅の終わりの瞬間を描きます。

求めるものをより信じられるように。

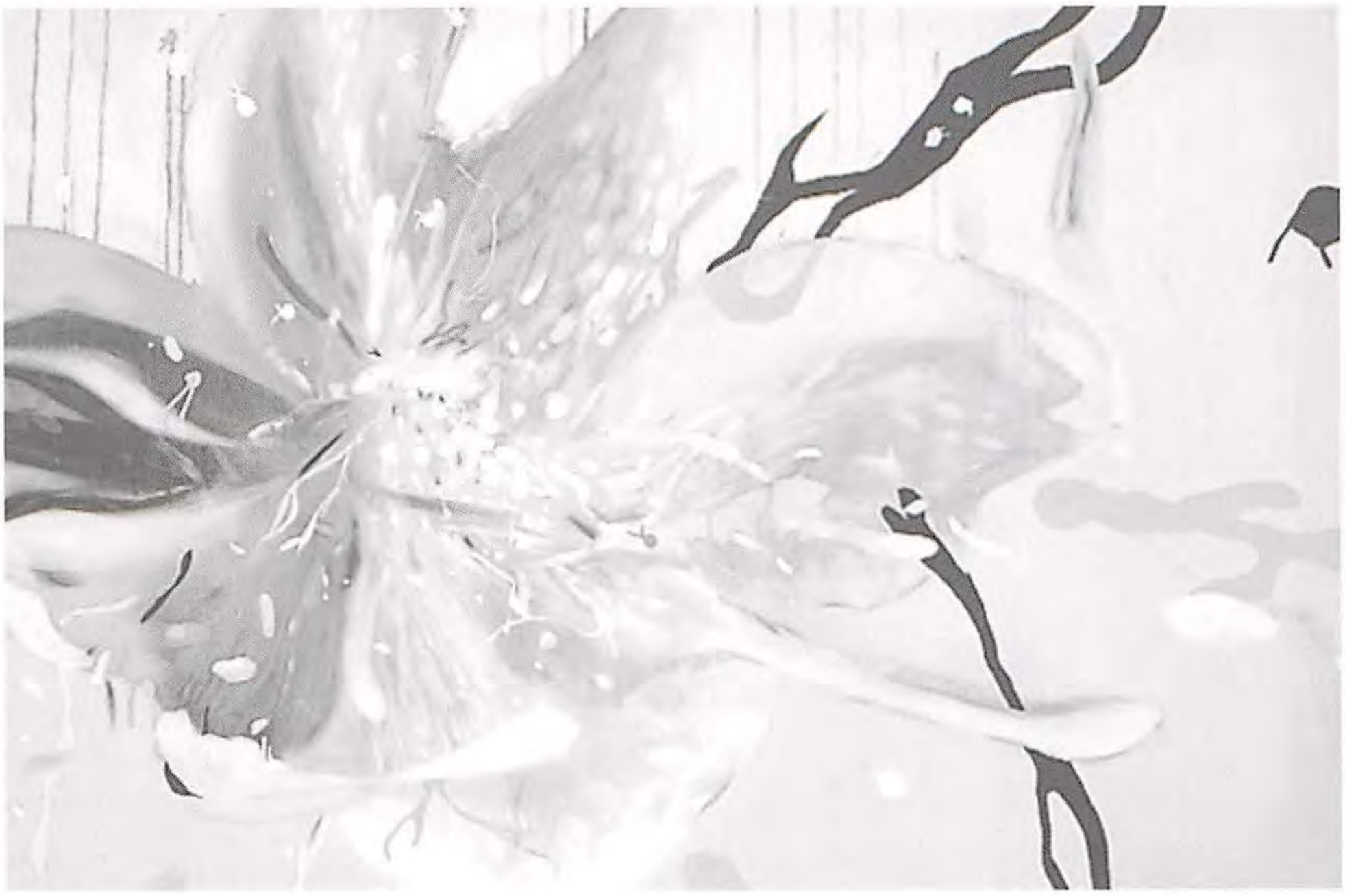
誰かに伝わるようにという願いと、伝わる誰かに出会えるようにとの願いを込めて。

自分だけの瞬間を求める本能と、絵を通して再体験できる幸福。

描くために旅をし、旅を終わらせるために描き続けます。

終わらないことを強く祈りながら。

うたとシャンデリア(biserica ortdoxa : la calafat)
綿布、アクリル、顔料、ソフトパステル
40.0 × 32.0 ㎝
2006 年
photo by Bogdan Garbovan



はるはなまつり(continua primavara)
綿布、アクリル、顔料、ソフトパステル
90.0 × 120.0 ㎝
2005 年
photo by Bogdan Garbovan

◆山田彩子

1981 年　岐阜県生まれ
2004 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2006 年　ルーマニア滞在中

個展
2004 年　成田空港アートギャラリー／千葉
　　gallery J2 ／東京
2005 年　セベリン市立美術館／ドロベタ・トゥルヌ・セベリン〔ルーマニア〕
2006 年　ルーマニア国立フランス文学図書館／クライオバ〔ルーマニア〕

グループ展他
2004 年　DETEN　スパイラルガーデン／東京
　　谷中日和　gallery J2 ／東京
　　アザーセンシビリティー展　シリーズ第 3 回「風化する花粉」　文房堂ギャラリー／東京
　　散歩のための散歩　IDEE service station ／東京
2005 年　Salon 2005　メヘディンチ県庁舎ギャラリー／ドロベタ・トゥルヌ・セベリン〔ルーマニア〕
　　Expozitie:Felix,Ioana,Ayako　ルーマニア文学博物館ギャラリー／ブカレスト〔ルーマニア〕
2006 年　Expozitie de Picturi de la D.TR.SEVERIN　ブラショフ市美術館／ブラショフ〔ルーマニア〕

The
Scholar 20
Perspective

アクリラート別冊 2006

発行日　2006 年 6 月 30 日発行
定　価　1,000 円（本体 953 円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
　　東京都豊島区東池袋 2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

－お詫びと訂正－
「アクリラート別冊 2005」(2005 年 6 月 30 日発行)に掲載(p52-p53)いたしました岡安真成の作品は、〈『Essential 細胞生物学』南江堂 監訳：中村桂子他 初版1999年〉のGoodsellの作品(p16)をモチーフとして引用したものです。
引用明記が不十分であったことをお詫びし、補足訂正させていただきます。

Holbein